

天龍川の

川の碑

竹入弘光

語りつぐ天竜川

国土交通省中部地方整備局
天竜川上流河川事務所

天龍川の

川の碑

竹入弘光

—— 目 次 ——

	はじめに	4
岡谷市	1 与謝野晶子歌碑	5
	2 開明社記念碑	6
辰野町	3 新村青圃句碑	7
	4 松尾芭蕉句碑①	8
	5 豊穰の碑	9
	6 松井芒人歌碑	10
箕輪町	7 有賀露草歌碑	11
	8 箕輪ダム由来碑	12
	9 水神	13
	10 西天竜水路記念碑	14
南箕輪村	11 以和清水記念碑	15
	12 御井神	16
伊那市	13 土地改良記念碑	17
	14 弁財天女神像	18
	15 井堰開鑿五十周年記念碑	19
	16 罔象女命	20
	17 井上井月句碑①	21
	18 種田山頭火句碑①	22
	19 御子柴君頌徳之碑	23
	20 伊那市上ノ原土地改良記念碑	24
	21 手洗い石	25
	22 戸隠大神・天伯大神・諏訪大神	26
	23 美篤土地改良記念碑	27
	24 天白宮	28
	25 土地改良記念碑	29
	26 春富井記念碑	30
	27 殿島橋記	31
	28 井上井月句碑②	32
	29 修堤記念碑	33
	30 西部開発記念碑	34
	31 八大竜王	35
	32 月蔵井筋記念碑	36
	33 原井大明神	37
	34 松尾芭蕉句碑②	38
	35 波切り不動明王像	39
	36 水路竣工記念碑	40
	37 水速女命	41
	38 山岳信仰の弁財天女神像	42
	39 山神石祠・水神石祠	43

はじめに

宮田村	40 六字名号を刻んだ巨石	44
	41 駒ヶ原耕地整理記念碑	45
駒ヶ根市	42 阪本天山墾田の碑	46
	43 一切水神碑	47
	44 井上井月句碑③	48
	45 宇賀神・弁財天・名号・蛇像	49
	46 水神	50
	47 菅沼堤防の碑	51
	48 井上井月句碑④	52
	49 駒ヶ根土地改良区記念碑	53
	50 水神	54
飯島町	51 大山祇神・水波能売神	55
	52 猿ヶ城用水記念碑	56
	53 開墾記念碑	57
中川村	54 天流功業義公明神	58
	55 蓮に巻き付く蛇	59
高森町	56 九頭龍大権現碑	60
	57 斎藤茂吉歌碑	61
飯田市	58 九頭竜像	62
清内路村	59 種田山頭火句碑②	63
	60 種田山頭火句碑③	64

石碑分布図Ⅰ（岡谷市～伊那市付近）

石碑分布図Ⅱ（伊那市～駒ヶ根市付近）

石碑分布図Ⅲ（駒ヶ根市～飯田市付近）

この本には天竜川上流地域伊那の、川に関わる石碑を収載しました。伊那は、西に木曾山脈(中央アルプス)、東に伊那山地・赤石山脈(南アルプス)が聳え、間を流れる天竜川の両岸に開けた盆地です。

地球46億年の歴史で、人類の出現は新しく、まして人間が自分の都合で地球の一部に手を加え改造し始めたのは最近のこと。地球は長年その必然によって大きく姿を変えてきたし、今なお変えつつあります。大雨が山を崩し土砂を押し流して平地を作る。やがて人類がそこに住み着き、農耕を始める。人間が住みいいように願って地球に改変を加えることを、地球は大目に見てくれるでしょうが、余り摂理に反するとびしゃっとする。農耕、特に水稻栽培には水が必然で、日本の歴史は水確保の歴史と言っても良いほどでした。水源から水を引く、大川から水を揚げて田圃に導く、新田を開く、川を作る、川を維持管理することの難しい事。自然はそうそう人間の思い通りにはなりません。地球環境を見据えた長期的対応が叫ばれるのはもっともなことです。

水を有効に利用する方法を講じる一方で、時として恐ろしいほどに表情を変える川に対し、築き上げた生活と文化を守るため、先人達は治水に積極的に取り組んで来ました。

石碑は出来事を伝えるのみでなく、実際の場所を記録にとどめます。その碑の立つ現地で辺りを見晴かせば、碑の語るところがよく理解できるはず。地域にとって長年の悲願であった堤防ができあがり、洪水の危険が去った喜びを人々は石碑の建立により後世にいつまでも語りついでいます。先人が川とかかわり、その時代の理にかなった方法で築き上げてきた生産と生活の場、先人の英知と努力の証として大切な意味を持っています。

今日、石碑に刻まれた歴史を少しでも多くの人に伝えるために本書をまとめることになりました。本書は、地域を天竜川の上流とし、岡谷市～下伊那を視野に入れましたが、結果的に上伊那が多くなりました。内容は信仰の石碑、記念碑、歌碑句碑などで天竜川とその支流にあって、川・水に関わるものとししました。実地に歩いて見出し、土地の人々に聞き、あるいは個人の、市町村の案内書・研究書・報告書などにより、さらに実地に確認してまとめたものです。その総数は60に絞りました。これらを見ると、地域の生活と文化に、川が、水がいかに密接だったかを改めて認識させられます。先人達の治水、利水にわたる輝かしい功績をたたえ、その遺徳を後世に伝える一端を本書が担えるならばこのうえない幸いに思います。

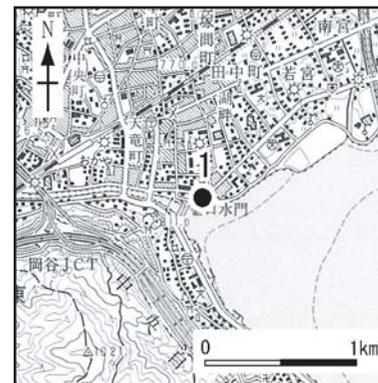
なお、筆者は「伊那毎日新聞」に平成11年から「伊那の石仏」を連載していますが、今回「水神」などその一部を利用させていただきました。また、本書が割合短期間に完成できましたのもひとえに編集に関わっていただいたみなさまのお力添えによるもので、ともども感謝にたえません。

1 与謝野晶子歌碑

岡谷市湖畔一丁目 岡谷湖畔公園

表 諏訪の湖天竜となる釜口の水しづかなり絹のごとくに 晶子のうた
裏 おぼえがき 歌人与謝野晶子しばしば信濃路に来たる。たまたま大正十四年正月夫鉄幹画家石井柏亭らと岡谷の地に来遊、天竜河畔をおとずれ、この歌を詠む。このたび湖畔の天竜公園に文学碑建設の議おこり、岡谷市および岡谷商工会議所をはじめ同志相はかり、この地にこれを建立す
昭和四十七年四月二十八日

与謝野晶子（1878-1942）は、堺市生まれ、新詩社に加わり、雑誌「明星」で活躍。歌集『みだれ髪』『舞姫』の他、数多い。古典の現代語訳『新訳源氏物語』、女性問題、社会問題の評論にも活躍した。晶子は、大正14年(1925) 正月、夫鉄幹、石井柏亭らと下諏訪へ来遊、7日まで亀屋に滞在、この間岡谷の地にも足を運んだ。昌子は生前自分の歌碑建立について、気が進まない旨述べたことがあり、事実歌碑は少なかったが、このころは各地に続々と建立された。



国土地理院発行：1/50000地形図「諏訪」



2 開明社記念碑

岡谷市御倉町 御倉町公園

高さ300cm

表 開明社記念碑 農商務大臣牧野伸顕篆額 (漢文を書き下す)

信州諏訪郡天竜川上の西地は工業に適す。郷の俗、堅忍にして進取の風有り。明治十一年戊寅、居民協力して製糸の社を創る、名は開明。社員黽勉にして、業務太張す。十七年甲申更に共同再操場を設け、機械を改造し、糸質は均一なり。是に於いてか製糸は益精良にして、事業は愈発展し、数年にして釜数は二千を超え、産額は五千筐に達す。并して社員各自が営む所の釜数は一万、産額は三万、工場の設は実に一府十一県に亘り、これを横浜及び欧米各国に輸出する。社名は嘖々として内外に聞こえ、称して本邦貿易品中の巨擘となす。四十年丁未四月、営業規約の期が満ち本社を解散す。乃ち其の業績を記し石に勒し、以て諸を不朽に伝えんと欲し、文を余に請う。余曰く、方今万邦修好貿易惟に競って国富を積む所、国威は随って振う。我が開明社の業は其れ我国の富と国威に資するところ蓋し尠少に非らざる有り。此れ以て銘すべきなり。銘に曰く、工を興し業を奨め 闔し郷の風を成す 資はゆたかに家は富む 財は見上げる人は豊か 開明の称 千古空しからず

明治四十五年壬子四月 大日本蚕糸会会頭 男爵松平正直 撰文

(1912) 大日本農会副会頭 農学博士横井時敬書

明治初期の諏訪地方の製糸業は規模が小さく、共同の結社開明社が生まれた。世話人片倉兼太郎・林倉太郎・尾沢金左衛門、製糸業者15名で結成、共同販売、品質の統一向上、原料繭の共同購入等による業績の振興を図った。製糸経営はこの結社が主軸となって展開された。



国土地理院発行：1/50000地形図「諏訪」



3 新村青圃句碑

上伊那郡辰野町上平出旧梁場 県道端西側

表 朝光に 梁場の名残り すすき噴く 青圃

碑陰 ヤナの由来 江戸時代より此の地天竜川に常設梁あり。称して新梁と言ひ鮎鰻等々多量の魚獲有りたるも、西天竜開設、其の他に依り漸次減少し、昭和の初期遂に撤去するに至る。 青圃記 昭和五十一年十月吉日 新村青圃先生句碑建設委員会建之(1976)

天竜川の魚類捕獲目当ての梁は、風物詩としても格別の風情があった。次の『上伊那郡史』の記事は、高遠城主鳥居忠春(1624-1663)が梁漁を楽しみにしていたこと、内藤頼卿(?-1735)の時代に一郷の所有に移して運上を奉らしめたこと、大正10年(1921)ころは個人経営であったと知られる。

平出坪梁のこと

鳥居忠春高遠城主たりし時代、上伊那郷平出村に御茶屋を建て、時々ここに來りて遊興に耽る。この時肴酒の膳に上らしむる魚を得んが為に上伊那郷中に命じて坪梁を作らしめたり。鳥居氏去りて後もこれは廃止されずして存在し、内藤頼卿の時代に一郷の所有に移して運上を奉らしめ、安永元年(1772)より平出村有に帰し、現在にては請負入札に附し個人経営となり居れり。

新村青圃(1909-1985)は、平出の屋号ふじやの人。俳句は佐藤雪洞に師事。戦後復活した「よもぎ社」の昭和47~49年社長を務める。



国土地理院発行：1/50000地形図「諏訪」・「高遠」



4 松尾芭蕉句碑①

上伊那郡辰野町辰野 下辰野公園

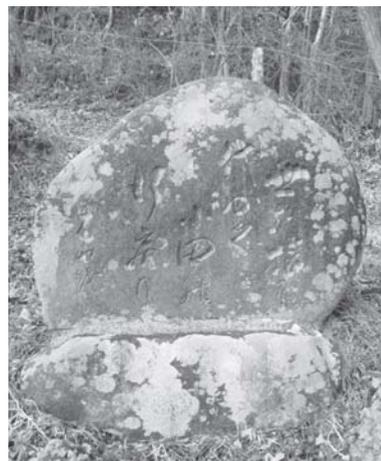
表 世を旅に代かく小田の行戻り はせを
碑陰 寿林館眉明他十六名の俳号

公園からは南方遙か見渡される。句碑が数多く立っているが、この句碑は上から少し下ったところにある。眉明は平出の俳人。林源左衛門、後、源太。文政八年(1825)生まれ、素嵐に師事。岩石・波月ら門人数十名。明治44年(1911)没、87歳。揮毫はこの人。建立銘はないが、明治30年(1897)ころの建立か。

碑句は、元禄七年(1694)、名古屋の荷兮亭に5月23・24日の2日逗留した折の感懐。田圃の代掻きで行きつもどりつしているのを見ると、自分も旅で行ったり来たり繰り返した生涯が思われる。



国土地理院発行：1/50000地形図
「伊那」・「高遠」



5 豊穣の碑

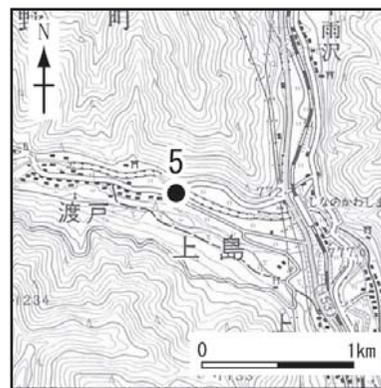
上伊那郡辰野町上島渡戸

渡戸は、三州街道、信濃川島駅のところから1kmほど西に入った最初の集落。

表 豊穣 辰野町長 樋口義一書

裏 昭和三十八年七月十一日川島地域を襲った大豪雨に依り、横川国有林大滝沢において十名の尊い人命をうばい、数千石の流木を伴う鉄砲水は余勢をかって横川川の木橋全部を押し流し、遂に午後零時二十五分頃渡戸鍋倉橋上右岸堤防を決壊、下の前雑地田は本流と化し、中の海に達す。此間流木堆積二千石に及。災害地の惨状、筆舌に難。渡戸地区の被害状況次の如し。流失家屋一戸、床上浸水三戸、水田流失二丁三反八畝、埋没四丁八反四畝、土砂流入二丁七反二畝、冠水二丁歩、木橋流失二。以上の大災害復旧に当町当局の御配意に依り、下の前雑地田農地復旧計画樹立と共に、渡戸土地改良組合を結成し、復旧に当る。時三十八年九月、同年十二月請負入札の結果、壱千九百参万壱千円にて豊田建設株式会社に落札。三十九年一月着工、五月十日災害復旧区画整備工事完了。同年中の海宮木田を辰野町第一次農業構造改善基盤整備事業の指定を受、四十年年度事業とし、六百八十五万円にて豊田建設株式会社請負。四十年一月六日着工、五月十七日竣工。渡戸地区水田十六丁四反歩の整備事業完成に依り、換地登記は辰野町が実施、四十八年一月十日完了。全工程修了完成を記念し、碑を建立。

昭和四十八年十二月 渡戸土地改良組合 石工請負 竹花良知
基礎工事 後藤則雄



国土地理院発行：1/50000地形図「塩尻」



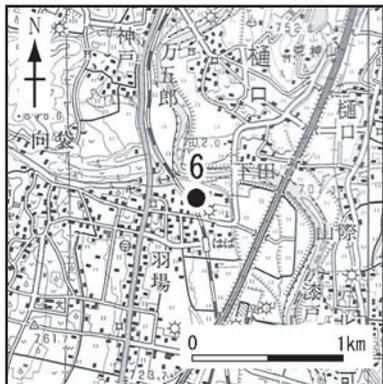
6 松井芒人歌碑

上伊那郡辰野町伊那富 羽場城跡 手長神社

天竜の流れゆくへは山低く国原遠し冬もかすめる 芒人

碑陰 昭和三十九年十一月二十八日 松井芒人先生歌碑建設会

松井芒人（1895-1980）本名源衛、明治28年（1895）羽場生まれ、長野師範学校卒。大正5年（1916）高島小学校に転任し、赤彦・文明・汀川らの影響を受け、『あららぎ』入会、作歌にいそしむ。昭和55年（1980）没。「上伊那通信歌会」を発展させ、歌誌「流域」を創刊主宰し、伊那を中心に多くの歌人を育てた。天竜川を主動脈とし、その流域に会員が多く、彼自身は「アララギ」の歌人であるが「流域」は流派にとらわれない方針で、歌を寄せ合って互選互評、研鑽に努めた。そういった先生を慕う多くの人々の協力で歌碑が建てられた。伊那小学校など校歌作詞も数多い。歌集『岡草』『青野風』『草のつゆ』『随縁集』『続随縁集』などがある。碑歌は、郷里羽場の原頭から南方を遠望した伊那の風景をよく描写している。



国土地理院発行：1/50000地形図
「伊那」・「高遠」



7 有賀露草歌碑

上伊那郡箕輪町松島153号線沿い 追分歌碑公園

表 天竜の浮水きしみて釜口の七つの門にいますはれゆく 露草

裏 有賀露草（一八八二—一九六一） 箕輪町沢有賀亀三郎の長男に生れ、小学校補修学校に教員として奉職し、沢路原神社の御遷宮の歌を作詞した。大正の初めより太田水穂を中心とする白夜会に矢島夕月夜・今井邦子・米山緑村等と共に作歌に精進した。又村会議員として村政に携わり、更に西天竜耕地整理組合副組合長として、其の半生を土地改良に貢献した。晩年は歌集を発刊し、八十歳の生涯で多くの作品をのこした。

平成十四年春 康人三女矢花知子建之

歌碑は2002年5月建立。茅野市在住の三女矢花知子さん、「父が亡くなり40年の歳月が経った。その間『歌碑を』と思い続けていた。建立できてとてもうれしい」と除幕式であいさつ。塩尻洗馬産の国光石、高さ165cm・幅90cm、重さ2トン。台石御岳石、高さ60cm・幅150cm、重さ2.5トン。

歌碑公園には、町に所縁の人々、藤沢古実・国風会の上田閑相らの歌碑が立っている。



国土地理院発行：1/50000地形図
「伊那」・「高遠」



8 箕輪ダム由来碑

上伊那郡箕輪町東箕輪長岡 箕輪ダムサイト

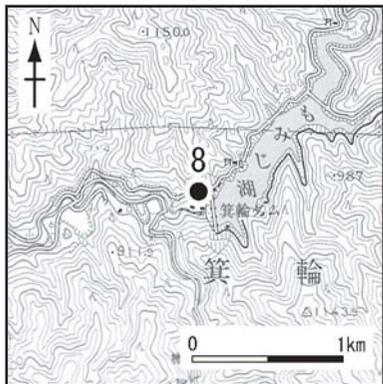
箕輪ダムへは箕輪町長岡、南小河内から沢川沿いに5kmほど遡る。

表 山紫水明 長野県知事吉村午良（長文につき要約）

裏 古来田無川と呼ばれた沢川は、源を守屋山に発し母なる川として人々の暮らしをささえ親しまれてきた。この川は地域にとって生活に灌漑に必要な不可欠な川であったが、ときに大水害を引き起こし下流の人々を苦しめた。そこで県では天竜川流域の災害防止と、伊那谷住民の暮らしの水を永久確保するためここに箕輪ダムを建設した。湖底に沈む長岡新田37世帯は、やむなく先祖伝来の土地をはなれ、村落350余年の歴史を閉じる尊い犠牲を払い、下流の長岡・両小河内の3区もまた沢川の利用について大きな理解と協力を示し、よってダムが完成した。ここに地権者と関係3区に謝意を込めて由来碑を建立する。沢川の水伊那の谷を永遠にうるおす

平成四年八月吉日 長野県 箕輪町 長岡新田地権者伊在丸永二外36名

広域水道等、ダムの恩恵は絶大だが、移住を余儀なくされた地域住民の愛郷の思いも大きく、スポーツ公園・樽尾沢天狗坂・落合・菖蒲ヶ沢・日陰神社等にも記念碑が建立されている。



国土地理院発行：1/50000地形図「高遠」



9 水神

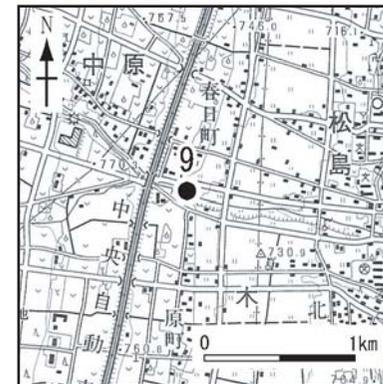
上伊那郡箕輪町中箕輪松島 春日街道西方 帯無川左岸

荒れ地を田圃にした水利家

帯無川左岸、春日街道西約200mの田圃の畔に松の木が一本、その下に立つ「水神」碑。碑陰記は、漢文。読み下すと「余、沢地方に水道を経営して久し。本年一月中旬起工してこれを試みるに頗る有望なり。更に工を督して三月下旬竣工。けだしこれ邦家殖産の旨なり。こいねがわくは、将来この水に耕す者、余の主旨を誤らざらんことを。歡喜の余りこれを録して後人に遺す。明治三十一年五月 中箕輪村松島 市川重松」

これによると、市川重松は、百余年前の明治31年(1898)1月、水を求めて起工した。横井戸であろう。そして3月には竣工した。すぐ南が帯無川であり、その利用は、と考えるが、当時は護岸もない氾濫原野で、水量一定せず、当てにできなかったろう。横井戸は当時流行のように各地で掘削が行なわれた。今、碑のすぐ下から澄明な水が流れ出ている。

市川重松について、『上伊那誌人物篇』は、「市川重松(1851-1925)治水家。松島村岡一郎の長男。帯無川の氾濫原の払い下げを受けて二十数町歩の桑園とし、近隣の失業者に養蚕を奨励した。帯無川北岸十数町の護岸工事を私費で完成。今も一部残り、重松堤防と呼んでいる。更に横井戸を掘削し、明治31年竣工、今も町余の水田を潤している。」と紹介する。彼は荒れ地を耕地に献身した。苦労したが、歡喜でもあった。各地にこうした先覚者がいて今日の繁栄がある。



国土地理院発行：1/50000地形図「伊那」



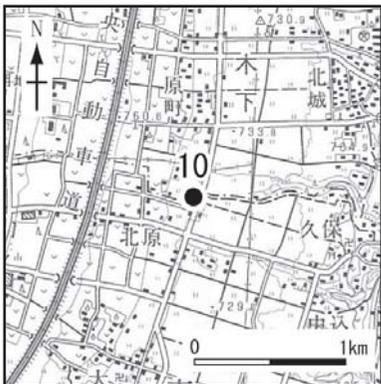
10 西天竜水路記念碑

上伊那郡箕輪町中箕輪木下 西天竜耕地公園

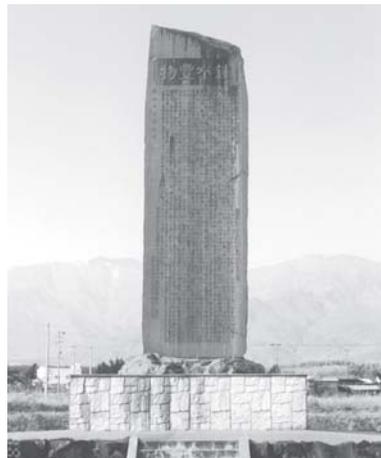
日本一の水路に日本一の碑

春日街道の西側、一望十里の高台に、東面して立つ巨大な仙台石の碑は、街道を往還する人誰もが思わず見上げる。ここは南箕輪村境の木下地籍。碑石は高くて計ることもできない。上部に、題字「鍾水豊物」（鍾はショウ。水をあつめて物を豊かにする、の意）、下に水路と開田の経過と維持の重要性を子孫に説く文字がぎっしり。伊那谷北部の天竜川右岸は、経ヶ岳ふもとの広大な扇状地で、水が乏しく、生産性の低い畑と平地林であった。そこで天竜川の水を諏訪郡川岸村地籍で引いて辰野町箕輪町南箕輪村伊那市地域を貫流する江戸時代からの悲願の水路を明治30年代に企画、大正11年（1922）幹線水路着工、昭和3年（1928）10月完成。開田1191ha、開畑102ha、事業費総額680万円で、昭和14年（1939）4月完成した。年々3万石余の大穀倉地帯として食糧増産に貢献した。

『伊那路』第485号掲載、原隆男氏の、「鍾水豊物」夜話、は同氏の父君孝也らの水路にかけた熱意尽力が伝わる記録。父君らは日本一の水路にふさわしい碑を建てようと、仙台市郊外稲井村に行き、長さ840cm、幅240cm、厚さ60cmの石を、当時の金額、7000円で購入。建立は戦争で中断、戦後の25年になったが、題字伊沢多喜男、碑文木下出身の木下信、揮毫田代秋鶴。当初題字は東条大将にと相談し、多喜男に仲介を依頼すると、「己は東条には頭を下げんと」と応じなかったという。戦時中を考えると多喜男の戦争嫌い・反骨が際立つ。



国土地理院発行：1/50000地形図「伊那」



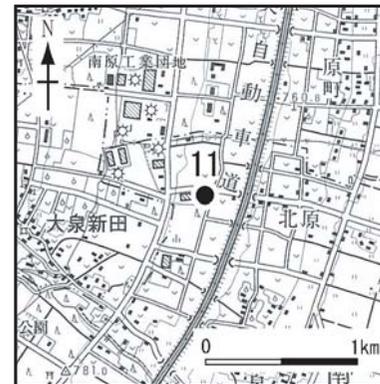
11 以和清水記念碑

上伊那郡南箕輪村北原

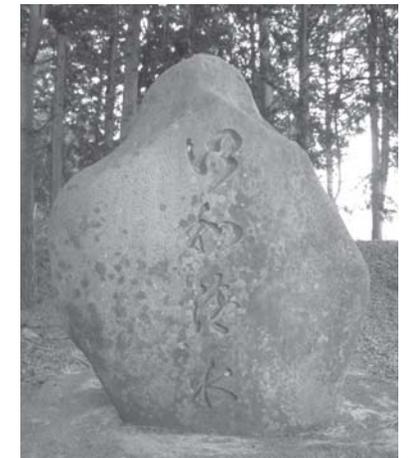
以和清水 清水国人村長此の地に水道を創設、区民の福祉を図る。茲に碑を建て其の功德を不朽に伝ふ。 昭和33年 北原以和清水水道組合

北原開墾地は幸い7～8間掘れば飲用水が得られたので、共同で大規模の井戸掘削を計画、大入地籍に村有地の払い下げを受け2基を掘削し、電気揚水により水道施設が完成、これにより飲用、洗濯、家畜飼養等の揚水が確保された。

清水国人は、昭和29年(1954)3月から41年(1966)3月まで、12年間村長を務めた。碑のある大入地籍は、中央道西で、日本電産ロジステックの東に平地林が続いていて、その北端に位置する。



国土地理院発行：1/50000地形図「伊那」



12 御井神

上伊那郡南箕輪村南殿 役場東

役場東の村道路傍に東面して立っている。平らな仙台石の表面にぎっしりと漢文が刻まれる。伊那の中央アルプス山麓の地は今でこそ西天竜が潤しているが、広大な扇状地も大泉川は伏流していて昔は田圃を作れなかった。この碑は、飲用水にもこと欠くこの南殿の地に横井をうがち、五町歩余の開田を成し遂げた起業者の功績を称えるもの。次に原漢文を判読して掲げることにはします。

御井神 官幣中社諏訪神社宮司従六位安東正胤篆額

横井記念碑 農の本は水に在り。水無ければ鋤のふるいようがない。良農の意を用いるのは真にゆえあるかな。我が南殿は居民少なく十有余戸、天竜・大泉の二川が東南を画す。その沿岸にはゆたかな田が有るとはいえ、崖の上、村の在る所は、水利が行き渡らない。姥懐の一泉も台所の用にすぎない。有志者はやくこれを憂え、明治二十六年八幡入りの地を相し、横井を鑿ちもって灌漑に便せんと欲した。しかし横井の起地は御料林に属するので、御料局静岡支庁に陳情し、当路は特に保安林二畝十一歩を解除した。是に於いてや資を投じ工を起し三百余間を掘鑿す。そして泉が滾滾と湧いた。以後開田五町歩余、居をここに移す者十有余戸に至る。嗚乎水の利の人に於けるはこのように大である。起業者等の功、どうして偉大でないことがあるうか。今年関係者があいばかり、石に刻んでもって後人にのこすというに。大正四年五月

裏面には、起業者有賀光彦他、有賀姓3名、清水姓4名、山崎姓3名 計10名。開拓者有賀姓4名、清水姓6名、山崎姓3名、唐木姓1名 計14名を刻む。



国土地理院発行：1/50000地形図「伊那」



13 土地改良記念碑

上伊那郡南箕輪村向河原

現在、碑のある向河原は、天竜川左岸で、伊那市福島と箕輪町卯の木の間に位置する。

表 「利天地」伊那土地改良区

裏 (要点) 伊那土地改良事業の目的沿革成果 土地改良事業こそは実質的な土地の拡大と、地力の改善とによって、近代農業の基礎を築き、経営の合理化を計り、以て農業生産力の発展を招来する。伊那土地改良区は、昭和二十六年十二月着手、三十一年四月完成。箕輪町北小河内南小河内長岡木下三日町福与、南箕輪村久保塩井北殿南殿田畑神子柴、伊那市福島野底上牧中央区御園山寺荒井西町の二十部落の人々が延べ四十万人により、総面積二千町歩、区画整備八百町歩、暗渠八四六、排水路四十軒、農道百三十七軒、橋梁百二十八ヶ所、なお天竜川横断頭首工による二大灌漑用水路を起工、総事業費五億五千四百万円。今や農地整然、湿田は乾田化、縦横に走る農道は機械化農業を作り上げた。収穫は年一万余石の増収の実績をあげた。その喜びを永久に記念すべく一碑を建立して偉績を後人に伝えるのである。

昭和三十一年五月吉日 伊那土地改良区理事長下平昶四

題字元農林大臣広川広禪 篆額長野県知事林虎雄 理事名略

(元山寺に建立したものを、昭和46年(1971)4月移転)



国土地理院発行：1/50000地形図「伊那」・「高遠」



14 弁財天女神像

伊那市西箕輪羽広 仲仙寺

経ヶ岳麓の古刹仲仙寺境内、本堂の南の後方に小さな池があり、その中に一基だけ安置する弁財天の女神像、碑の高さ58cm。蓮華座に座す女神は右手に宝剣、左手に宝珠を持つ。円光背に梵字キリーク・ウン・サク（またはソ）を刻む。弁財天の像はこのあたりで滅多に見られないめずらしいもの。あごの所が欠けているのは残念。

裏面に漢文で造立趣意を記す。要旨は、「文化六年は己巳の年で弁財天の縁年に当たるので石に彫って永く当寺と村中の繁栄を祈り奉る。現住範翁代 林宗賢・西村森左衛門」「文化六年は己巳の年で弁財天の縁年に当たる」とは、十二支の巳は蛇で、巳は水辺に祭られる弁財天と同一の神とされた。巳待ち講が昔は各地に結成されていた。巳待ちとって六十日毎に巡り来る己巳の日の夜に弁財天の祭りを行なう。また、六十年毎の己巳の年にも弁財天の縁年だと弁財天を祭る。己巳年の今年文化六年（1809）に弁財天像を造立して仲仙寺と羽広村の繁栄を祈るという。この女神の持ち物宝珠は、如意宝珠で、どんな願いもかなえてくれる。剣は邪悪を退散させる。場所から水神と見たいところだが、銘文から福神としての弁財天である。

林宗賢（1748-1830）は、羽広の人で医者・俳人。長寿で文化元年仲仙寺二王門前に芭蕉句碑を、文化二年本堂裏山に四国八十八カ所の石仏を造立するなど、文学や仏教関係の碑を多く建てている。



国土地理院発行：1/50000地形図「伊那」

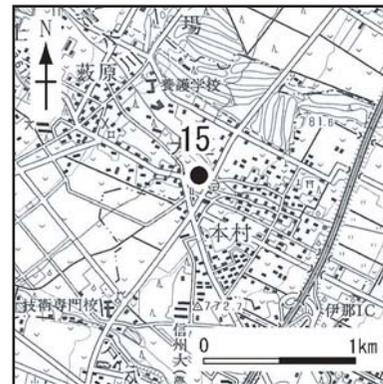


15 井堰開鑿五十周年記念碑

伊那市西箕輪大萱

表 紀念 井堰開鑿五十週年 上伊那郡長堀江忠也書 大正十一年十二月
大萱田用井堰は水源を北沢山字赤岩に発し、延長二里灌溉反別約十五町歩に亙る。明治五年四月起工、同年六月竣工す。抑大萱の地たる水利に乏しく区民の之を憂ふる久しかりしと。偶々筑摩県出仕本山盛徳氏勸業土木を奨励しつつあるを聞き、時の戸長小松新吾・名主重盛五郎治出願惣代人となり、具に区民の苦衷を訴へ、漸く本井堰開鑿の許可を得、幾多の辛酸を嘗めしが僅々三カ月の日子にして完成を見しは、当時区民が如何に本事業達成に翹望せしものありしかを窺知するに足らん。爾来当区は農耕上に一大変革を来し、区民は永劫本井堰の恵沢に浴するを得ん。今や五十週年に當る。茲に故人の偉績を温ね録して後世に伝ふと爾云 井掛中

箕輪南西部は昔から田用水が乏しく、確保が長年の悲願であった。大萱では当初から独自で小沢川系の北沢の赤岩（北沢三軒屋のすぐ西）から取水計画をたてたが、取水権は下流の西町が持っていたので、権利料を支払って取水可能になった。明治五年（1872）に引いた井筋は赤岩から北沢左岸の段丘下を中原までトンネルで引き、上戸の下を経て大萱公園西まで通じている。この井筋により14haの開田ができた。



国土地理院発行：1/50000地形図「伊那」

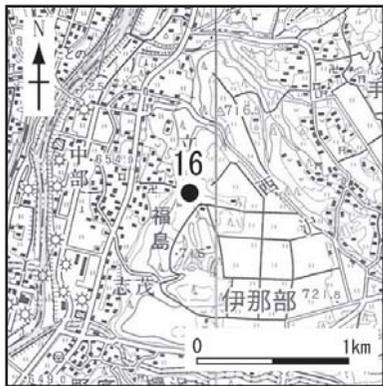


16 罔象女命

伊那市福島 三沢寺東洞

福島立正、三沢寺の東方で、洞を160mほど登った水源の上にある。高さ132cmの碑石の表面を磨いて、主文「罔象女命」と大書する。「みつはのめのみこと」と読み、水神である。時の通信大臣安達謙蔵の揮毫。裏面に詳細な記述がある。要約すると、福島は水利に欠け、保健火防の心配があったので洞口水源から簡易水道を計画、昭和2年(1927)5月竣成、6月水神塔建立。

罔象女は、720年成立の『日本書紀』に登場する。いざなぎ尊いざなみ尊の国生み、神生みがあって、「(いざなみの尊)のかむさりまさむとする間に、伏しながら土の神埴山姫および水神罔象女を生む。罔象をば美都波と云ふ。」岩波、日本古典文学体系『日本書紀』は、「罔象は、水神、また水中の怪物」『莊子』や『淮南子』、汜論訓の注「水の精也」などを引用し、罔は、形をかくして見えない意。「ミツハのミツは水。ハは未詳」と説明する。すると、罔象は、すでに古代中国に現われている。日本にいつ輸入され、どんな神か未詳だが、水神とされたことは確かだ。『古事記』と同じ「みずは」という水神に、『日本書紀』は中国由来の罔象を結びつけた。この系統の水神は、伊那市手良野口中組「罔象女神」昭和2年(1927)建。伊那市大泉新田、神社前「水象女命」文政五年(1822)建等がある。長谷村溝口の「水速女命」、辰野町下辰野三輪神社の「水速女命」等は、用字も発音も少し違うが、『古事記』『日本書紀』に由来すると考える。



国土地理院発行：1/50000地形図
「伊那」・「高遠」



17 井上井月句碑 ①

伊那市伊那荒井区通町 小沢川伊那橋

表 柳から出て行舟の早さかな 井月

小沢川にかかる伊那橋架け替えに際し、自然石の親柱に井月の俳句を刻んだ。傍らの説明板の文は、次の通り。「井上井月(1822-1887)は、俳人。新潟県生まれ。東北や関西に芭蕉の足跡をたどった後、伊那に来て30年、家も妻子もなく、俳諧一筋に、仲間の家々を訪ねては1泊2泊、流麗な筆跡の高吟を残し、酒を愛し無欲漂泊の生涯をこの地に終わる 2000年(平成12)5月 長野県」

大河の端に柳が緑の枝を垂れている。その陰から姿を現わした小舟の速いこと。流れ下るスピードが同じでも、樹木や建物のないところよりは速く感じる。錯覚であるが、実感である。



国土地理院発行：1/50000地形図
「伊那」・「赤穂」



18 種田山頭火句碑 ①

伊那市伊那荒井区通町 小沢川伊那橋

表 あの水この水の天竜となる水音 山頭火

小沢川にかかる伊那橋架け替えに際し、自然石の親柱に山頭火の俳句を刻んだ。傍らの説明板の文は次の通り。「種田山頭火（1882-1940）は、「層雲」派の自由律俳人。山口県生まれ。井月の生き方に共鳴し、伊那行きを念願していたが、1939（昭和14）年5月3日、伊那に来て俳友前田若水の案内で井月の墓参を果たし、5日朝出発するまで当地にいて、風趣に富む幾多の俳句と日記を残した。2000年（平成12）5月 長野県」

5月5日朝小沢川を遡り、権兵衛峠を越え、木曾への道々の句にも水の句が多い。

わかれてひとり朝のながれをさかのぼる
水はおのづから里へわたしも若葉ふみわけて
岩に口つけてかつかつ飲める水で
ながれがここであつまる音の山ざくら



国土地理院発行：1/50000地形図
「伊那」・「赤穂」



19 御子柴君頌徳之碑

伊那市伊那荒井上荒井

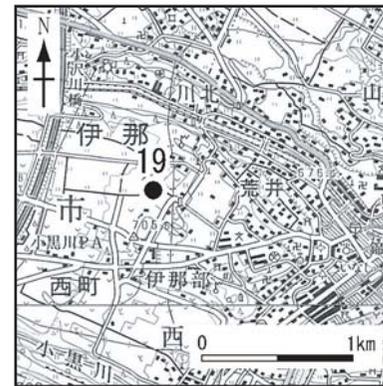
横井に捧げた命、木祠に水神宮を祀る

上荒井の集落の西南に位置する。西方一体は広大な畑地帯であったが、近年になって南方に勤福センターやグラウンド等ができ、近くに住宅が建ち賑やかになった。ここは断層崖の急傾斜で横井を掘り進む適地だ。

水神宮は木祠内に祭られ、北側の頌徳碑は、「明治三十九年十一月一日、荒井西町横井水権有志者建之」。高さ150cmの平らな碑で、上部に「御子柴君頌徳之碑」長野県知事が書き、文は上伊那農学校長飯田洪農の撰で詳細。ここ駒ヶ岳のふもとの村々は小沢川の水を頼りに水田を耕すが、水争いが絶えなかった。憂慮した御子柴艶三郎は、広大な荒地を良田にと遠大な水確保計画をたて、周到な準備の後横井を掘った。明治28年（1895）に縦井戸試掘、水脈発見、翌年から横井本工事開始、31年完了。私財を使い果たした。トンネルは延長600mに及び、幅120cm、高さ180cm、壁は石組、天井は諏訪の鉄平石を用いた本格派。

頌徳碑には「明治三十二年十二月十日病没」とあるが、宮下慶正先生の著作では自刃。「おれの生命は約束どおり神様にさしあげる。おれは水神になるのだ」と遺書数通と辞世「海に入る初めは穴の春の水」を書き残し、自刃した。享年四十八歳。

碑の下方、横井から出た豊富な清水が分水柵（ます）で別れ、40haの田を潤し、学校の防火の役も果たした。冬でも枯れず、秋には菜洗いの光景も見られる。



国土地理院発行：1/50000地形図
「伊那」・「赤穂」



20 伊那市上ノ原土地改良記念碑

伊那市日影上の原

碑の位置は、伊那公園東方の上段で、ここからは東部中学校が真下に見える。碑高240cm。碑文要約。

表 天恵無窮 伊那市上ノ原土地改良記念碑 長野県知事西沢権一郎書

裏 事業の概要 この土地改良事業は長野県営三峯川総合開発による土地改良事業区域内にて、地区内には旧陸軍飛行場で農林省開拓財産処分地を含む通称上ノ原区域にて、全面畑作地帯の全耕地七十余町歩の内、総合開発計画による当地区への高遠ダムによる水田割り当て地籍以外の地域は、全面畑地灌漑に計画されたも、…全面水田化の声高まり、…ポンプ揚水、全面水田計画を決め、昭和四十二年六月までに全地区の基盤整備と揚水機の施設事業並びに地区外排水路の計画事業の完了をなしとげたについては、組合員二百九十名の人の和、農林漁業金融公庫よりの六千五百八万円と地元負担金一千九百万円、合計八千四百八万円により完了した。土地改良事業の最後の換地計画は、四十五年十二月十八日登記の完了により、組合員の総意にて記念碑を建て後の人につたえる。

昭和四十五年十一月十八日 組合員氏名 (略)

理事工事委員長 中村俊夫他工事施行業者 吉川建設株式会社
南信日立商品販売株式会社 森田石材店 岡谷市長地森田茂



国土地理院発行：1/50000地形図
「伊那」・「赤穂」



21 手洗い石

伊那市手良中坪 清水庵

水鉢は青石を用いて緻密

清水庵（きよみずあん）は手良中坪集落の東方の高いところで、眺望がよい。（同じ中坪にある清水寺（せいすいじ）と別）本尊は京都清水寺、播磨国清水寺の本尊とともに同一木より彫刻と伝承する。

清水庵の正面登り口右側に手洗い石。神仏に参るにあたり手を清め、心身の塵を払う。青石を用いて緻密に磨き上げる。水鉢は80×63cmの長方形で、猫足が付いている台石三段、上部の鉄製の竜は、戦時中金属回収で出してしまったが、戦後笠原の赤羽政右衛門氏が、祖先が寄付の一人であった縁もあって、作り直したという。青竜が両足で二つの球を押さえ、口から水を吐く。

銘文は「奉納 安政四丁巳七月建之」1857年。下の台石三面に寄付者を刻む。筆頭は「金式百疋 世長戸中」、世長戸とは何か、私が思案している、堀内功さんは簡単に、ヨナガトで、現在は米垣外と表記、と。庵の西方の十戸足らずの集落で当庵も所属する。次の「同百七拾五疋 郷ノ坪・境中」、百疋の下村・久保村・田屋村・上村（カムラ）はいずれも地元中坪の内、まず地元の集落から書き始めている。「金式百疋 芦沢村中 世話人矢島喜兵衛」、以下各百疋ずつ個人であるいは集落中で、合計四十四口、四千六百七十五疋に上る。（疋ヒキは銭十文、のち二十五文の称。疋＝銭十文だと銭四十六貫七百五十文、金にすると、十二両弱、二十五文ならその二倍半。）石工彫刻代に、祝賀費用も含まれようか。寄付は近辺が当然多いが、日影・古町、さらに福与・木下、中には辰野町沢底も。随分遠くから寄付している。清水庵は檀家はないが、信者は多く、養蚕が盛んな時代には蚕の神様として信仰され、清水祭りには参詣人で賑わった、という。



国土地理院発行：1/50000地形図「高遠」



22 戸隠大神・天伯大神・諏訪大神

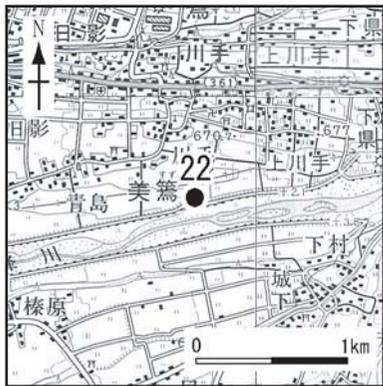
伊那市美篤 青島堤防

諏訪大神に三峰川の治水を祈願

伊那市美篤青島の三峰川堤防右岸に、高さ127cmの大きな川原石の碑がある。主文は、「戸隠大神 天伯大神 諏訪大神」と大書。碑陰記は、「紀元二千五百五十九年九月十六日 青島区」で、建立は、百余年前の明治32年（1899）の秋に当たる。堤防という所在地から、水神様の役割を期待したと推察される。戸隠大神は、九頭竜権現を有し、治水の神。

諏訪神社は、言うまでもなく、長野県諏訪湖周辺に上社下社が鎮座し、日本有数の由緒を持つ神社。古くは、狩猟神、農業神であったが、源氏が諏訪の神を尊崇して、平家を滅ぼす等、平安時代末期～中世には武神として日本中に広まった。しかし、民衆にはやはり農業神であった。今でも、秋の収穫期の風除けに諏訪神社の薙鎌（なぎがま）を高く掲げて祈る。また治水祈願もした。

美篤青島の上流、上大島の諏訪神社の縁起によると、平安中期の寛仁二年（1018）秋、三峰川が洪水して、家屋が流れた。そこで、宮島という者が諏訪神社に参詣祈願し、御霊代（みたましろ）を請い受けてきて祭った。神徳によってたちまち水勢和流し水瀬変わって家屋に障りがなくなった。一同は仰いで社を建て諏訪大明神を当地の産土社と尊崇した、という。諏訪神社を農業神として、治水の神として信じていた例証である。



国土地理院発行：1/50000地形図
「伊那」・「高遠」・「赤穂」・「市野瀬」



23 美篤土地改良記念碑

伊那市美篤上原

表 豊穰 上条信山 美篤土地改良記念

裏 我が美篤村は三峯川右岸の段丘に拠る10余部落を併合し、信濃の枕詞にちなんで名づけたものであって、明治八年初めて置く所である。現在耕地凡そ六百七拾町歩、戸数約八八〇、人口四七〇〇を算し、住民すべて耕作を業とする純農村である。早く六道原の開拓を初めとして、或は二番井筋の開発、或は芦沢南割上大島における水田の整理等、常に農地利用の増進に努力しつつ、もって今日に及んだのである。たまたま太平洋戦争の終結を契機として、全国に農地改革の施行せらるるや、村民率先この国策に応じて農事に一層科学的合理的経営の実を挙げんものと、昭和22年全村域並びに手良村の一部を合せて美篤村全村耕地整理組合を設立し、工事は直ちに着手された。後法の改正によって美篤全村土地改良区と改組され、…昭和二九年三月完成。田畑六三〇町歩、区画整理三八九町歩、暗渠排水四一町歩、水路延長一九五軒、橋梁五二五にして、経費総額1億円、その六割村民負担。挙村一致百年の大計に協力した賜。事業の完成を記念、偉跡を後人に伝えんとする。昭和二九年一二月二〇日秋 九州大学名誉教授春日政治撰 東京教育大学講師信山上条周一書 昭和二九年秋健之 美篤土地改良区（台石に組合長矢島武治以下一〇五名列記）

第二次世界大戦後、食料事情逼迫、生産増加を図るには耕地整備が先決と村長矢島武治が提案し、賛同を得て、美篤全村耕地整理組合を組織、昭和29年（1954）までに全村にわたる区画整理が行なわれた。が、土地改良事業はなお続行された。



国土地理院発行：1/50000地形図
「高遠」・「市野瀬」



24 天白宮

伊那市東春近 榛原河川公園沿い三峰川堤防

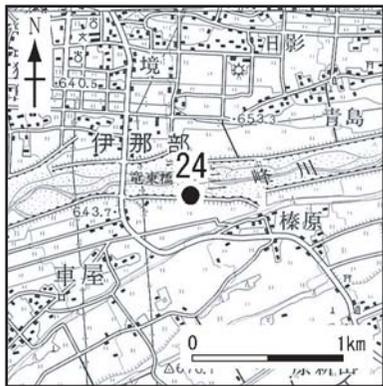
天白宮に水難よけを祈願

車屋集落の東方の三峰川左岸堤防、竜東橋上流500m。堤防は美しく整備されて、歩道ができた。堤防の南側の大きな斜面。高さ82cm、幅122cm、厚さ23cmの横長で薄い粘板岩の碑石に天白宮と大書。碑陰に、「水難除願主」として、一四名の氏名を刻む。姓を上げると、織井四名、戸田二名で、他は伊藤・井上・兼子・笹谷・橋爪・星野・細田・吉原が一名ずつ。大方車屋・榛原地区の人とみえる。星野氏はどこか。

堤防から見渡す広大な平地、稲が青々と、すばらしい穀倉地帯。だが、堤防が貧弱で三峰川の増水、氾濫、これを何万年来幾度繰り返してきたか。洪水で住民はどれほど苦しんできたか。

さて当地で水難除の神様を建てようと相談して、どういう神がよいかとなったとき、数ある神の中から天白宮を選んだ。それだけ天白宮は靈驗あらたかと信じられていたのだ。

天白は、天伯とも書かれ、美篤川手、同下大島、富県桜井、東春近榛原、西高遠等に神社があり、その他各地の祝殿に祭られる。また遠山郷の霜月祭にも登場する。ところが、意外なことに日本国語大辞典・平凡社大百科事典等や、宗教事典等に解説がない。黙殺された形だ。天白は、海人族が縄文時代中期に進出してもたらされた古い星神で、後世天皇族の日本支配によって多くの在来の神同様押しやられ、おとしめられた（松山義雄著『新編伊那風土記』）にも拘わらず隠然たる力を民衆の心に保っていると見られる。



国土地理院発行：1/50000地形図
「伊那」・「赤穂」



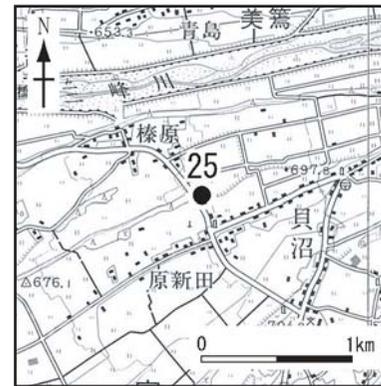
25 土地改良記念碑

伊那市東春近原新田 竜宮三社境内

表 仰偉績 土地改良記念碑 長野県知事 林虎雄書

裏 原新田の地古来水に乏し。井を掘り田を拓くは村人の宿願たり。遇々明暦元年佐久の人柳沢弥左衛門、開拓を企て小原村神明森下より三峯川を堰き、鞠ヶ鼻の巖壁を貫き、辛苦四年新井を通せり。万治元年六月鞠ヶ鼻の崩潰に逢い、資竭き業半ばにして帰郷す。後下井より分水成り開発緒に就く。明和六年柳沢氏の孫弥五衛門を迎え祖業の恢復を図りて果さず。文化十二年鞠ヶ鼻の嶮を避け、金井坂七回りの間、東西より隧道を穿ちしが孔中に齟齬して止み、新に九十九間を掘り抜き功を竣る。其費大にして一郷困窮す。為に藩主は夜業の出精を命じ、債主大草村宇内は公訴三次、出入廿余年辛くも之を濟せり。天保三年杉島村伊東伝兵衛大改修を施し、面目を一新す。爾来各村の要望に応じ、灌漑区域を拡め、種々三百余町歩を潤し、今日の隆昌を致せり。今回三峯川総合開発に方り、県と相議り、茲に碑を建て先人の功業を録し、以て後世に伝うる所以なり。昭和三十三年六月 細田義一撰并書

原新田の地古来水に乏しく、井を掘り田を拓くは村人の宿願であった。早くも明暦元年（1655）佐久の柳沢弥左衛門が開拓を企て、近くは、天保三年（1832）杉島村伊東伝兵衛が大改修を施す等により、開田が進んできた。今回の三峯川総合開発により、画期を迎えるにあたり、あらためて先人の偉績を仰ぐ、という。



国土地理院発行：1/50000地形図
「赤穂」・「市野瀬」



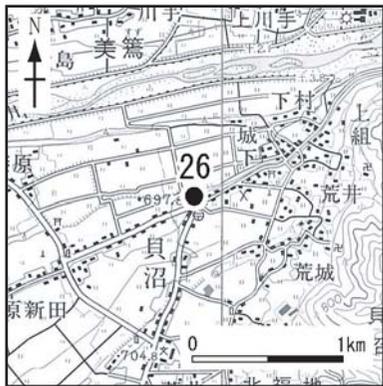
26 春富井記念碑

伊那市富県貝沼西原 郵便局前

表 開発記念碑 農林大臣三浦一雄

裏 東春近富県の耕地三百町歩を潤し郷土開発の根源となれる春富大井筋関係水利事業の沿革につきて大要を記せば、古来貝沼桜井地区は上井下井により新山川の水を引き灌漑し来り、その後明暦元年佐久の人柳沢弥左衛門、三峰川を水源とせる新井を掘り、水田開発を企てたるも成功せず、文化年中原新田地区に於て再興を計り通水したるも多額の経費を要し、中絶となれり。天保三年杉島村伊東伝兵衛新井の大改修を行い、通水始めて完全となり、新山川の水を上井へ廻し、新井の水を下井へ通せり。尚前記三地区の外榛原北福地南福地上殿島の四地区相次いで加入し、井筋は七ヶ地区の共有となれり。その後昭和十二年耕地整理組合を設立し、同二十七年土地改良区に組織を改め、水路の改修と水田開発に努めたり。今回三峰川の総合開発により大井筋の形態一新せるに当り、先人の偉業をしのぶと共に、開発事業を記念して茲に碑を建て後世に伝ふるものなり 建碑委員会選 立花達雄書

右側 石工西春近村中山弥蔵 昭和三十三年十月



国土地理院発行：1/50000地形図
「赤穂」・「市野瀬」



27 殿島橋記

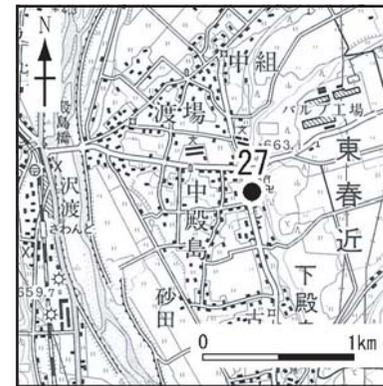
伊那市東春近中殿島 春近神社境内

東西春近を結ぶ交通の要衝、天竜川春近大橋は、元禄六年（1693）、長さ23間の定橋をかけたが、宝永七年に流され、以後たびたび架橋、流失を繰り返したが、天保六年（1835）高遠藩の補助のもと、長さ35間の定橋をかけ、左岸に岐神を、右岸に殿島橋記碑を建立し、交通の平安を祈った。（殿島橋記碑はその後、昭和44年（1969）、道路拡張のため、春近神社境内に移転された）

表 大己貴命 神道長小部良長（原文は漢文、ここには仮名交りに改めて記す）

裏 殿島橋記 それわが邦は一切人事は神代に始まる。本朝大国造神大己貴命は万民の命を預かり、救済の道を尽くす。医薬の方、舟梁の設けを職としてこれに因み、天流の河に、殿島橋の係るところ至って要にして洪水ごとに持たず。民力これがために疲る。先に元禄・元文の二回永久化を計ったがその功全からず。今年衆評が上聞に達す。ここにおいて郡吏佐藤嘉正、潮田資孝が往古に鑑み、将来を慮り一橋を成す。但し浩き河長い橋、金石固からず、希うところはその基址に存す、再造必ず術あらん、すなわち月甲子をもってその功をおわる。よってよって歳月を誌すと云う。

天保六年十月甲子 代官 今村勝蔵喬貞 松田永菴題并書
造営奉行池上三右衛門秀周



国土地理院発行：1/50000地形図「赤穂」



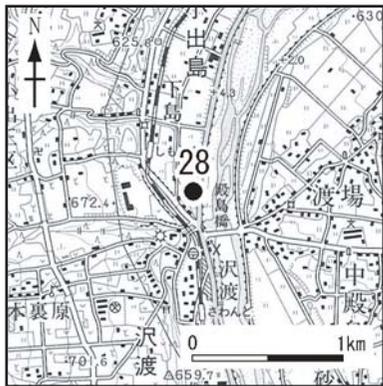
28 井上井月句碑 ②

伊那市東西春近 春近大橋

- 1 春風に待つ間程なき白帆かな 井月 (西南柱・沢渡帰帆)
- 2 礎は亀よはしらは鶴の脛 井月 (西北柱・殿島橋新築)
- 3 暮れ遅き鐘のひびきや村渡し 井月 (東南柱・光久寺晩鐘)
- 4 降りかくす麓や雪の暮さかひ 井月 (東北柱・駒峰暮雪)

1 春風に待つ間程なき白帆哉

井月作「八景の句」といって、天竜川を挟んだ東西春近、宮田三村の良い景色を詠んだ八句のうちの三句、及び2は殿島橋新築の一句。1は、「沢渡帰帆」と詞書あり。これは天竜川の通船で、鉄道開通以前は入舟飯田間を盛んに往復した。荷物を積んで下った船が帰ってくるころ。春風を受けてスピードを増した白帆がなんとも爽やか。天竜川に再現してみたい光景だ。別に、沢渡には天竜川の対岸に人を運ぶ渡し舟があった。



国土地理院発行：1/50000地形図「赤穂」



29 修堤記念碑

伊那市西春近表木 法音寺入口

表 修堤記念碑 (原漢文を読み下し文に改める)

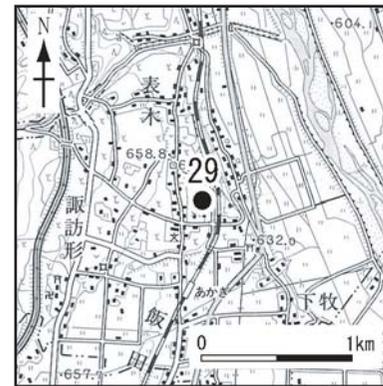
本区は天竜川右岸に在り、古来洪水の流れが患いをなす。堤が崩壊し、家は水に漂い没し、田は変じて砂となること数次、居民安堵せず。明治初年その惨極まる。そこで官費を仰ぎ、民の資を募り、しばしば補修を加えた。しかしその方法がいまだ備わらず、一時の弥縫(ビホウ・とりつくろう)にとどまるのみ。二十三年始めて組合を設け、大工事を起こし、あけくれ経営、すでに二十余年を閲し、堤の長さ数百間、今その災いを免れるもの熟田およそ七十余町歩。たまたま国家大典にさいし、一碑を建てもって区民の勤労をあきらかにし、かつその竣工を祝うという。銘に曰く、

克勤克勞 積以歳計 既固既安 後人頼恵

従四位勲三等伊沢多喜男書

裏 大正四年乙卯十一月

天竜川築堤に取り組む。天竜川は日本の三大急流といわれ、雨季には暴れ天竜と化し、災害をもたらす。ここ表木でも災害続きで住民を苦しめてきたが、明治23年(1890)に組合を設け、官民協力20余年の大工事で数百間の堤防を築いた記念の碑。



国土地理院発行：1/50000地形図「赤穂」



30 西部開発記念碑

伊那市西春近赤木 会所南

表 甦天地 農林大臣 鈴木善幸書

裏 伊那西部農業開発事業発祥之地

記

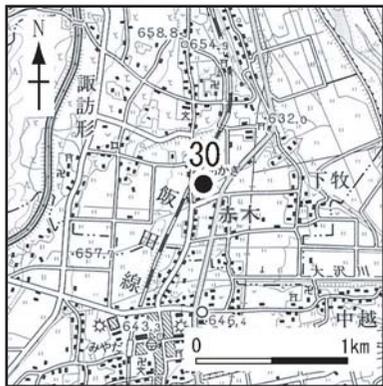
昭和四十一年に計画された中央高速道路の関連事業として、伊那市より辰野町に至るまでの天竜川西側台地の広大な農地を開発し、この地域の発展を目途として計画されたのが伊那西部農業開発事業である。爾來関係市町村の協力によってその計画が進められ、昭和四十三年四月国県が調査を開始し、昭和四十七年九月実施予算の決定をみたのであるが、国の食糧政策の変更により受入態勢に關係市町村は難航した。たまたま当地区（諏訪形、赤木、下牧）の關係者一同は、土地改良の重要性をよく理解し、幾多の困難を克服し、伊那西部農業開発の第一期工事として、県営大規模畑地帯総合土地改良事業を完成した。

地権者二百三十二人 総事業費二億二千二百四十二万六千円 施行総面積八十三万六千平方米 施行年度自昭和四十七年至昭和五十年

昭和五十二年四月二十九日

西部伊那土地改良区第十三工区水田地区 高雲書

伊那西部の広大な畑地を稲田にと、第二の西天竜を企画、折しも米余りという食糧事情の変遷も在り難航したが長期的視野にたち断行、大型農道も通り、西部は活気づいた。



国土地理院発行：1/50000地形図「赤穂」



31 八大竜王

伊那市高遠町西高遠 建福寺

独鈷の池・弁天堂とのゆかり

高遠町西高遠の名刹建福寺。裏手は段々高くなって山に至る。墓地は左手に多く、上方に鉾持神社が望まれる。真後ろから右に進むと独鈷池。かたわらの木蔭に細長い碑が見える。白ミカゲの高さ185cmほどで「八大竜王」と大書。上部に、「水」の文字を蛇のように描く。八大竜王は、仏法を守る八体の竜神で、雨水を治める。

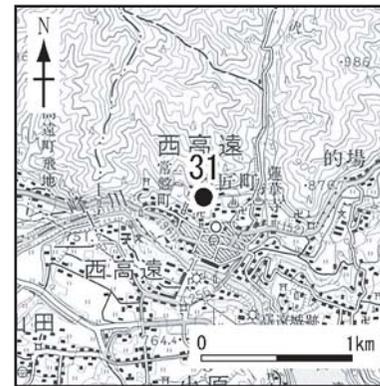
この石碑は、ここにある独鈷の池・弁天堂にゆかりをもつものであろう。今見る池は浅くて変哲もないが、大層な歴史を持つようだ。独鈷の池の後ろが断崖になっていて、その巖の上に弁天堂。『木の下陰』によれば、昔河原にあったものをこの地に勧請したという。独鈷は、とっこ、どっこと読み、密教用仏具の一つ。中央に握りがあり、両端がとがって、きねの形にする。池を独鈷の形にしているのであろう。

「独鈷の池」標示を見る。昭和61年(1986)3月付で、高遠町の建立。「寛元四年(1246)中国南宋の僧大覚禪師が鎌倉に建長寺を建立。その後各地を行脚、やがて伊那郡鉾持村、文覚上人加持のこの独鈷の池で、忽然と現れた白髪の老人に寺社の建立を請われると苦心の末、鉾持山乾福寺興国禅寺を再興。つづいて一社を造営、鉾持大権現とされ、この地方の人びとの深い信仰を集めている」と。乾福寺は、保科時代に建福寺と改めたが、独鈷の池は同寺ゆかりの霊水である。

蘭溪道隆(1213-1278) 鎌倉中期の臨済宗の僧。宋の人。道隆は諱。諡は大覚禪師。

文覚上人(1139-1203) 平安末・鎌倉初期の真言宗の僧。俗名遠藤盛遠。

『木の下陰』寺(建福寺)の北岡に池あり独鈷の池と号く。いにしへ高雄の文覚上人加持ありし霊水なり。



国土地理院発行：1/50000地形図「高遠」・「市野瀬」



32 月蔵井筋記念碑

伊那市高遠町荊口中屋 薬師堂

銘文 郡代浅井又七郎 岡野小平治 井筋奉行池上三右エ門・清水兵作・近藤彦蔵・田中吉郎兵衛 世話役荊口村名主伝之丞・八郎右エ門・長左エ門・山室村名主清右エ門・利兵衛・平蔵 弘化四丁未歳八月(1847年)

三義から東高遠の城下までの井筋を藩直営で引いた御用水。御家中の用水と、東高遠上段の新田開発が目的、というところにこの井筋の特徴がある。

薬師堂の下は暗渠にして通水していたが、その石垣に積み込んであったものを、先年井筋修理の際掘り出して堂の庭に据えた、というもので、正式な記念碑とは異なる。井筋奉行清水兵作の書いた「作料勘定仕分帳」を見ると、荊口赤坂から東高遠の郷方役所まで7800間。前線を数区に区切り、各責任者を決め請け負わせて工事を急いだ。人夫は領内各村に割り当てて出させた。人足と別に、職人は黒鍛920人、石工1036人、杣52人、これらの職人は地元のほか、三州・美濃からも来ている。



国土地理院発行：1/50000地形図「高遠」



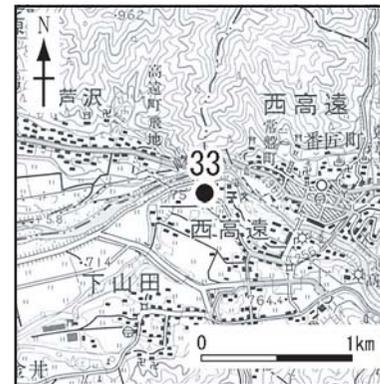
33 原井大明神

伊那市高遠町小原 神明社跡

小原井筋開設の苦難

高遠町小原集落は、三峰川左岸で、川より急斜面で高くなっている。したがって生活用水も水田用水も南の五郎山から湧き出る僅かな水を頼りにしてきた。溜め池を幾つも作ったりしたが、絶対的に不足。そこで、江戸時代末期に長谷村溝口の左岸辺から三峰川の水を引いて、勝間を経て小原に供給する小原井を作った。はじめ伊東伝兵衛参画、上井を西方山腹に作ったが、夏水枯れ、放棄。三峰川から引水する下井に変更、高遠藩より借金、医師細田元順の援助で行詰りを克服してきたが、最後に医師太田立斎(1828-1886)が乗り出してようやく開通したのが慶応二年(1866)。全長7 km余、白山下の絶壁ではことに難儀した。井尻にあたる小原の神明社の森に「原井大明神」の碑を建立した。原井大明神という神名があるのでなく、ここでの造語であろう。小原の地は水に乏しい、と筆を起し、経過説明、工成り新田が出来、戸口増加、炊事の煙が起こることは実に壮観だと。この土地に後世衣食する者は、こい願わくは先覚者の艱苦を忘れるなかれと。太田立斎の撰文。漢文であるが、ここには要点を示した。

その井筋は今も使っているが、水は美和ダムから引水した一貫水路から引き、給水範囲は小原地区だけでなく三峰川左岸の広い地域に広まった。新規の美和ダムからの引水だが、建て前は、下井の改修であり、三峰川から水を引く「水利権」が生きた、といえる。



国土地理院発行：1/50000地形図「高遠」・「市野瀬」



34 松尾芭蕉句碑 ②

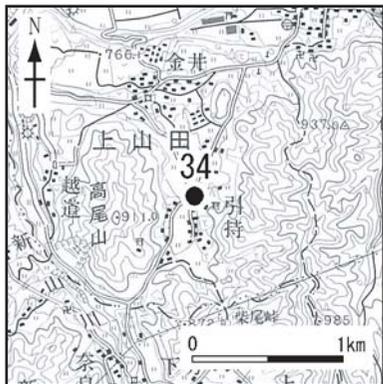
伊那市高遠町上山田 引持公民館庭

表 松風の落葉か水の音涼し 翁 拙庵居士書 碑高98cm。
碑陰 世話人 小松奈良治他4名 石工平岩国平他 補助吉田羅山
明治二十二年五月一日 (1889)

拙庵は本名白鳥篤宗(1821-1893)、高遠に生まれ、進徳館に学ぶ。高遠学校教員。書道・生花・茶の湯などを教える。

碑句は、『蕉翁句集』に貞享元年(1684)の部に出る。その夏江戸深川での作。

同じ句の碑がほど近い伊那市富県貝沼、貝沼公民館に立つ。こちらは六波羅霞松の揮毫。松風の音と川の涼しい音。当地の実感である。



国土地理院発行:1/50000地形図「市野瀬」



35 波切り不動明王像

伊那市高遠町原勝間 勝間大橋

不動明王に三峰川の治水を祈願

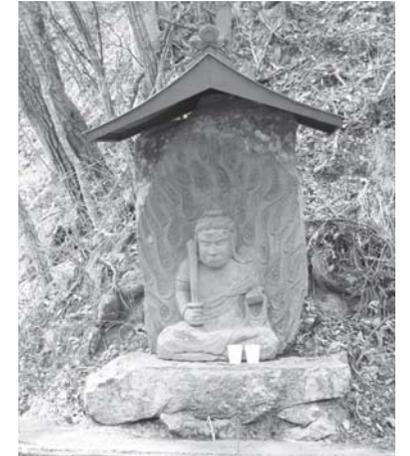
高遠町原勝間の三峰川に架かる常磐橋という大橋。この橋のたもとの上流側に不動明王が座していられる。ここは、目くるめく急斜面が、遙か下方の三峰川に落ち込む。今はすぐ上流にダムが巨大な壁を築き、川の大部分の水を発電用にとってしまって僅かしか流れて来ないが、本来は相当の水量の急流で、一旦嵐となれば忽ち増水、三峰川沿岸は梅雨に、台風に、いつも洪水におののいてきた。そこで、勝間の村人は、水の脅威を鎮めてもらおうと不動明王に登場願った。

石工は、かの有名な守屋貞治(1765-1832)。彼の細工帖に「大聖不動明王 勝間村 大橋」と自身で書き付けたもの。高さ125cmほどの高遠産の青石を削って、像高68cmの不動明王の座像を浮き彫り。磐石上に座す明王は、目を大きく見開いて、口を固く結び、右牙を上、左牙を下に、黙想する。右手に剣、左手に索を持つ。不動尊の定型だが、光背に生動する燃え盛る炎。幾分うつむいて怒りをじっと押さえている表情。守屋貞治の傑作と評価は高い。波切り不動明王は、弘法の話から生じたという。弘法大師は延暦二十三年(804)に唐に渡る際、荒波に漂流し福州にからくも上陸できた。

波切り不動明王は、長谷村市野瀬の掘り抜きにもある。明治23年(1890)秋市野瀬区中で建立した。主文は、「戸隠神社 水神宮 不動明王」で、やはり、粟沢川と三峰川治水を記念しての建立と思われる。



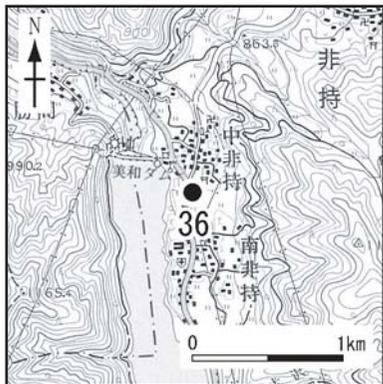
国土地理院発行:1/50000地形図「市野瀬」



36 水路竣工記念碑

伊那市長谷非持 諏訪神社境内

表 美和一貫水路竣工記念 仙流拓沃野 長野県公営企業管理者 相沢武雄
裏 林県政の重点施策の一つ、三峰川総合開発事業は、天竜川治水策として
支流三峰川に美和ダム築造を企画。ために美和村では水没家屋 34戸、
移転農家70戸、水没耕地 100ha、山林原野 95ha。この打撃に対し残村
の再建築として、美和一貫水路を提起、県も全面的に協力した。この土
地改良事業は昭和32年国の採択となり、同9月着工した。水路はトン
ネル・サイホン・暗渠を含め、総延長10余km、受益面積は180haに及ぶ。
工事は、洪水・落盤・資金難等の難関を乗り越え、昭和44年5月完成した。
この遺産を引き継ぐ後続の人々は先達の悲願を心として農業の振興、郷
土の発展に一層奮起せられんことを祈ってやまない。(長文につき要約)
昭和45年6月 長野県公営企業管理者 相沢武雄書



国土地理院発行:1/50000地形図「市野瀬」



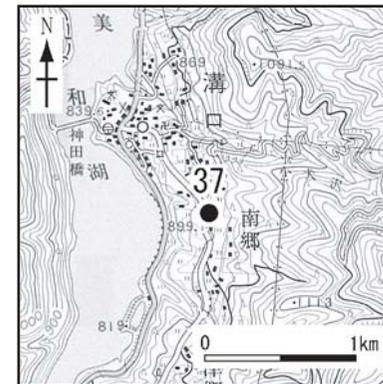
37 水速女命

伊那市長谷溝口 熱田社境内

熱田社は、本殿の周囲を飾る彫刻のすばらしさで知られる。その南側の木立
ちの下に石仏が並んでいる内の一基は高さ105cmの自然石に、「水速女命」と
大書。これは、「みずはやめのみこと」と読み、水神である。碑の表裏に刻ま
れる細かな記述を逐一読んでみよう。「常福俊龍敬書」は、溝口の常福寺の俊龍
和尚が碑文字を書いたこと。さらに「発担人富県邑埋橋与市 当所羽場善七
棟梁勝間村岡庭虎五郎 明治第十七年孟夏吉祥日」と造立事情を記す。しかし、
これではどうも事情がはっきりしない。そこで、『長谷村誌』の近世の111
頁などを参照。

およそ日本の農業においては昔から畑作よりは水稻栽培が有利だ。そこで、
どんな苦勞をしても水を引いてきて開田したいと日本中の農民は念願する。

鷹岩井筋は、溝口村・黒河内村で三峰川筋から水を引く。近世の天保四年
(1833)に着工したが、鷹岩は岩が固く難工事で、幾度か担当が変わり、結局
明治10年(1877)5月初めて通水できた。実に45年に渡り、井筋の延長8005m、
膨大な人足を要した。その後も勾配を正し、改良修繕を加え、今日につなげ
ている。明治17年(1884)に村中で祭典を執行、工事担当者の功勞を称える
とともに、通水の安定を願って水神碑を造立した。



国土地理院発行:1/50000地形図「市野瀬」



38 山岳信仰の弁財天女神像

伊那市長谷黒河内 小黒テイ沢

沢辺の岩上に 琵琶を奏でる

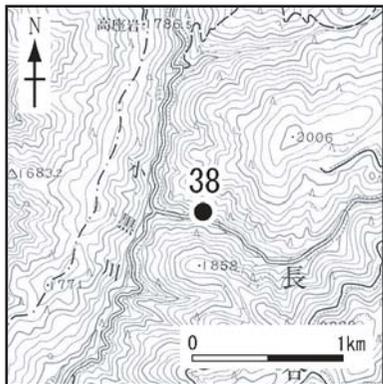
長谷村は南アルプス西麓の村で、広大な山林を持つ。三峰川は南の方、千丈ヶ岳南西～塩見岳北の水を集める。東駒ヶ岳～千丈ヶ岳北西の水を集める戸台川は、戸台で、北方から来た小黒川と合流して黒川となり、西流して三峰川に注ぐ。

テイ沢というのは、小黒川の随分上流で、富士見町との境の程久保山（1977m）から流れ下る沢。この沢は古くからの徒歩道で富士見町、山梨県身延に通じ、日蓮信仰が入ってきた。日蓮の谷の一つ。また沢をしばらく登った辺りは山岳信仰の一大拠点であつたらしく、多くの石碑が残る。

左岸に夫婦岩と呼ぶ巨大な岩あり、近づくも恐ろしい頂上に石仏が九基、また夫婦岩の右岸に五基、夫婦岩の下に二基ある。

夫婦岩下の沢辺の一基は、高さ2mほどの岩の上に安置される。岩が垂直で、よじ上れず、辺りは樹木が茂って暗い。どういう石仏か見当もつかない。ならばと、少し離れた所から望遠レンズで撮影、できてきた写真を見て、驚く。これは弁財天女神像だ。舟形碑に座す女神、やさしい顔立ち。持ち物は左手には琵琶か、右手には棒状だが不明、頭上に頂くは大きな蛇と見える。

右岸の石仏の中に、摩利支天や不動明王などがあり、また、一石に、「天八十万日結命 弁財天 大黒天」と三柱の神仏を並べた碑がある。いずれも山岳信仰の石仏で、駒ヶ岳・御岳行者といった人々の造立と見られる。福德を授ける弁財天は、山岳信仰でも祈願の対象であった。



国土地理院発行：1/50000地形図「高遠」



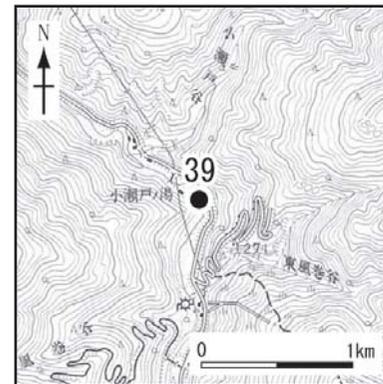
39 山神石祠・水神石祠

伊那市長谷 小瀬戸塩見荘上

山神ノ加護ニ依り荒倉嶽伐採

長谷村の一番奥の集落は杉島。三峰川の谷を南にさかのぼる。桃の木集落以南は住民が全戸移住でまったくの無人地帯だ。桃の木にはすばらしい出来映えの青面金剛像の庚申塔が路傍に並ぶ。戸草集落とあわせて桃戸の里と称した。十年ほど前から計画されている戸草ダムはこの上流の小瀬戸峡に造る。さらに上ると塩平（しょべらと読む）。ここにはかつて分校が有り、立ち退きの跡が痛々しい。ここまでは杉島に属するが、その上流の平瀬は浦の分かれという。ここも九年前私たちが調査に赴いた時は人が住んでいた。そこからずっと上ると、小瀬戸鉦泉がある。ダムは、このすぐ下まで水をたたえるという。

小瀬戸鉦泉塩見荘の西山を300mも上ったところに、高さ58cmの山神石祠がある。「山神ノ加護ニ依り明治四十一年荒倉嶽ノ伐採ヲ創ム 福島県人祭主金沢恵三郎」と刻む。明治41年(1908)は百年近く前の造立。ところで、小瀬戸鉦泉には三峰川に架かる吊り橋を東から西側に渡ったのだが、その橋の西側の岩上に別の石祠がある。これは水神で、「水神ノ加護ニ依り」と書き始める。以下の文は先の山神と全く同じ。つまり金沢恵三郎は、山神・水神二つの石祠を同時に造立して「荒倉嶽ノ伐採ヲ創」めたのだ。福島県の人がこの地に滞在して人夫を集め材木を伐採し、三峰川を流し下し、さらに天竜川を筏で下した。壮大な規模の仕事。神の加護を頼んで。



国土地理院発行：1/50000地形図「大河原」



40 六字名号を刻んだ巨石

上伊那郡宮田村 新田区マレットゴルフ場南道端

大きな石が幾つも横たわっている。その一つの巨大な石 (240cm・450cm・180cm) に「南無阿弥陀仏」と六字名号が刻まれる。南側の面に薄く僅かに文字が読みとれる。水防家の新十郎が水難除けに小刀で刻んだという。「桐の木沢の巨石群は村の水防生命線で、一度ここが崩れると新田河原町の人家や田畑は壊滅する危険性があった。新十郎が小柄(こづか)で刻んだ名号は保護対策への祈りであった。」

「新十郎は享和二年(1802)ころ新田の弥七の子として生まれ、天保十一、二年(1840-1841)に組頭を務めた。当時太田切川の氾濫は、村民の恐怖の的であった。…今でも新田から中越までの長い区間に残っている「小田切川原」という地名が、沃土たちまち不毛の川原と化す惨状の繰り返しを如実に物語っている。…水防家の新十郎が水難除けの名号を刻んだのは、この岸に立ち並ぶ大石は人為的に動かしてはならないとする鉄則を教えているのだと思う」

また、新田区中川端に「春日新助翁報徳碑」(正四位勲三等金井之恭書)が立っている。春日新助とは新十郎のことで、碑は明治36年(1903)ころ寺子屋の門人と村人らの発意で建立という。生涯寺子屋教育と太田切川の治水に尽力し、村民に感謝された。『宮田村の石造文化財』



国土地理院発行：1/50000地形図「赤穂」



41 駒ヶ原耕地整理記念碑

上伊那郡宮田村町三区里宮神社境内

表 豊穰 昭和三十三年四月吉日 林讓治書

裏上段 駒ヶ原耕地整理地区総面積 百六十五町四反八畝九歩

右耕地整理組合設立認可申請大正二年六月七日

第一次開田八十町歩認可 工事着手大正三年四月

水利差止事件 大正十三年提訴 昭和四年十月和解成立

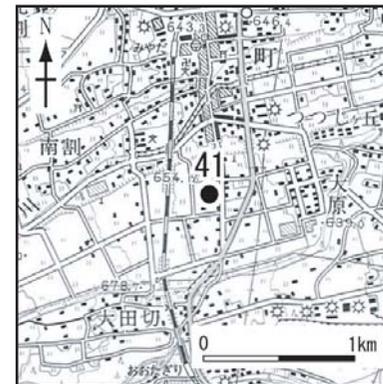
第二次開田認可八十町歩 昭和七年八月十八日

工事完了昭和二十二年七月

水利組合移行 昭和二十二年八月

土地改良区移行 昭和二十六年十二月二十五日

昭和三十三年四月吉日建之 (下段の役員名省略)



国土地理院発行：1/50000地形図「赤穂」



42 阪本天山墾田の碑

駒ヶ根市東伊那大久保 門前新六島

阪本天山（1745-1803）の墾田の碑が駒ヶ根市東伊那にある。天竜川左岸の東伊那の田園地帯、この地を「大久保門前、新六島」と呼び、崖の下に高さ250cmの大岩があり、その北面の平らに漢字がびっしり刻まれている。

この地域の天竜川流域は、西は駒ヶ岳から流れ入る大田切川、東から塩田川が流れ込んでその昔淵であったが、寛政元年（1789）秋の大雨で流れが変わり、土砂が堆積して平地となった。そこで、この地の中村道民は三年かかって堤防を築き、数町歩の水田を造成した。日頃産業振興の必要を痛感していた高遠の阪本天山が寛政四年（1792）秋、現地を訪れこれを誉め称えて、漢文を作り岩に刻ましめた。

その表題は、「大窪邨中邨氏墾田碣記」で、天山の署名、続いて「厚生之道、農の本たり。由来尚し。…」と内容に入る。（原文は漢文、ここは書き下し文に改める）まず中村道民の天山との関係を紹介。

大窪邨中邨氏世農に服し、兼ねて天竜河に材を下す事を監督す。まさに余弱冠唱業の時、中邨氏、名は成玉、余に従って学ぶ。因てあざなして孟璣という。若くして剛毅、始めよく勤めに服し、章句に粗通し、兼ねて大義を談ず。

孟璣（道民）就て墾闢し往々溝洫を通し堤防を三重にし、以て急流（唼流）を障る。三年にして良田を作り、力作の営む所、租税亦薄く、子孫榮生の計已に就く。

四年（壬子）の秋余たまたま浮遊してこの地に至り、孟璣の服する所を視て喟然として嘆じて曰く、これ有るかな。学植（稼）えるの間、先に余の師とする所老農に如かずと雖も汝の造る所却って樊須に勝る有り。業の就く所固より軌すべからざるあり。（次頁に続く）



国土地理院発行：1/50000地形図「赤穂」



詩に曰く、植えず（不稼）収穫せず（不穡）してなんぞ禾三百斛を取らん。旨きかな。孟璣欣んで、この言を記さんことを求（徴）める。たまたま崖前に一つの巨石有り。きめ滑らかにして題すべし。即ちけずりて、碑となし、あらましその終始を綴り、繋ぐに銘興を以てし、以て鐫る。且つこの碑や官たらずして私たり。何を以て淮西碑の殷文昌有るを慮らん。銘に曰く、

邑名大窪 地瀨竜河 中邨居止 世倚丘阿 低松之下
蛟竜之淵 造物之為 一朝変遷 瀉鹵数頃 庶幾百塵
有穀孟璣 墾為良田 爰稼爰穡 永足榮生 莨畝足樂
寧取相郷 乞文所宗 刻貽孫謀

（この銘文の訳文を次に掲げる。）

村（邑）の名は大久保（大窪）地は天竜川（竜河）のほとり（瀨）中村（中邨）居り止まる 世は丘（丘阿）に倚りかかり 低い松の下の 竜（蛟竜）の住む淵は 造物者の為 一朝変じ遷り やせた干潟（瀉鹵）の数町歩（頃）ができた

多くの屋敷（百塵）を乞い願ひ（庶幾）剛毅な（有穀）孟璣は 開墾して良田となし ここ（爰）に植（稼）えここに収穫（穡）する 永く榮生に足る 農村（莨畝）は楽しむに足る 寧ろ郷を助（相）けるを取る 文を乞い宗とする所を刻み子孫に遺（貽）さんと謀る

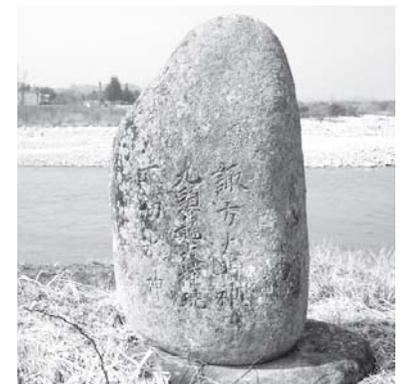
43 一切水神碑

駒ヶ根市東伊那大久保 門前新六島

表 諏訪大明神・九頭龍大権現・一切水神
右 安政三丙辰年九月吉日（1856）



国土地理院発行：1/50000地形図「赤穂」



44 井上井月句碑 ③

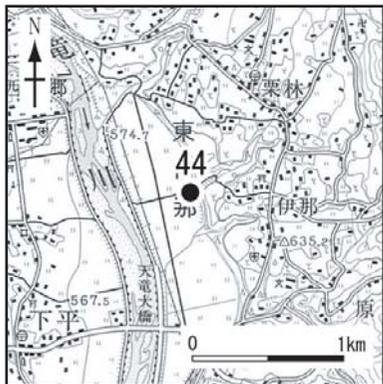
駒ヶ根市東伊那伊那耕地 駒見大橋東

表 舟を呼ぶこゑは流れて揚雲雀 井月

碑陰 舟を呼ぶこゑは流れて揚雲雀 井月

夢のかけはし駒見大橋の竣工を祝しこの地にゆかりの深い俳人井月の句碑を記念として建立する 平成十一年十一月吉日 駒見大橋竣工記念碑建立実行委員会 駒ヶ根市東伊那区有志一同

天竜川のこの近くの下り松に渡し場があって、対岸から声がかかると、渡し舟が動き出す。なんともものどかだ。平成11年（1999）に、東伊那ー下平間を結ぶ新橋駒見大橋完成。東たもとに句碑ができ、12月4日除幕式。碑の文字は井月の他の作品から集字した。碑石は、洗馬産の御影石で、高さ台石から3m、台石は中沢産の安山岩、舟の舳先が東を向いて進んでいるように見え、東伊那の未来を象徴しているようだと湯沢実行委員長が語ったというが、橋ができた喜びの大きさが伝わってくる。



国土地理院発行：1/50000地形図「赤穂」



45 宇賀神・弁財天・名号・蛇像

駒ヶ根市中沢竹ノ沢

五穀豊作を神仏に祈る

中沢の谷底を新宮川がかけ下る。中沢の中割を過ぎて上割集落の上が落合、北から落ち合う大曾倉川に沿って少し上ると、右側に中山区竹ノ沢集落への入り口がある。そこに筆塚・馬頭観音等が数基あり、中央の一基は、高61cm、形の秀麗な舟形碑。下方に蛇の陽刻、身をちぢめてくねらせる。中央に「宇賀神」向かって右に「弁財天」左に「南無阿弥陀仏」と細く陰刻。

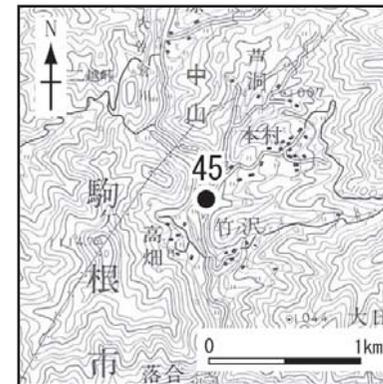
宇賀神は、うかじんと読むが、後世うかと濁音にも。仏教に説く穀物神。転じて福の神とされるため、弁財天と同一視され(注)、密教にも取り入れられた。白蛇の形をとることが多い。

『古事記』に「豊宇気毘売神（とようけひめのかみ）」、『日本書紀』に「豊宇気姫命」として登場する神が、伊勢神宮の外宮豊受（とようけ）大神宮の祭神、豊受大神。「うけ」は「うか」の音が変化したもので、食物の意味。「豊宇気姫命」の別名を、稲魂、倉稲魂と書き、「うかのみたま」と読み、稲の穀霊を神としてあがめたもの。のち、五穀をつかさどる神とされた。民衆になじみ深い稲荷信仰の主神が倉稲魂神で、共通の信仰である。

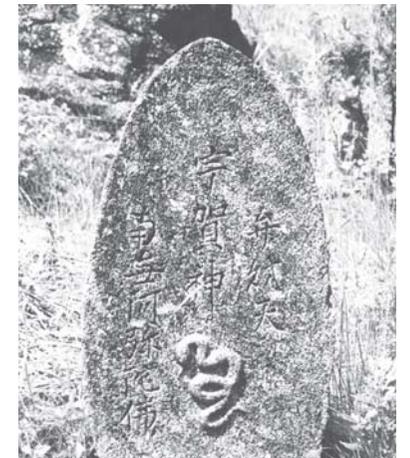
さらに「南無阿弥陀仏」と刻んである。阿弥陀仏に帰依し奉れば現世での幸せと、極楽往生ができるという。

この竹ノ沢の碑は、神仏にすがって五穀豊作・幸福を祈念するものと私は考える。

(注) 駒ヶ根市町二区に、文字碑「宇賀弁天」(明治29年建)あり、両者合体の例。



国土地理院発行：1/50000地形図「市野瀬」



46 水神

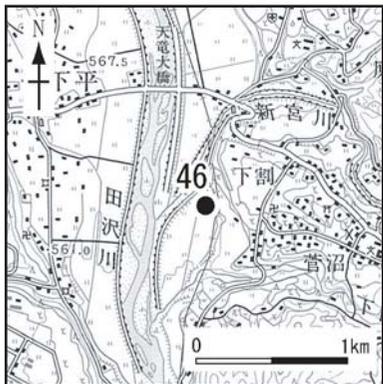
駒ヶ根市中沢菅沼 竹花プラント南東

表 水神

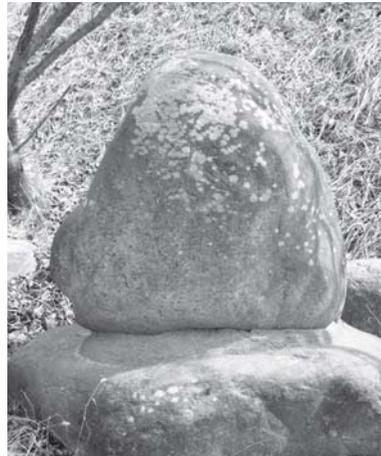
右 明治十八酉十二月（1885）

明治18年（1885）に水神碑を建立したが、それには地域住民の洪水防止の切実な願いが込められている。当時の模様を『駒ヶ根市誌現代編上巻』553頁は次のように記述している。「明治十七年ころ菅沼の字前河原を中心とする天竜川通りには六三町歩余の水田があった。古城下には一〇〇間の大土手(堤防)が築かれたいたが、十七年七月の洪水で聖牛多数を流失、大土手も危くなった。菅沼耕地では一八歳～五〇歳の男子総出で防御に当る一方、水害鎮めを祈願して諏訪神社へ代参二名を立てた。その年は…大土手が残ったものの、…翌十八年六月からの大洪水では、古城下の大聖牛一〇組と中聖牛二組、大土手一〇〇間の内八〇間を流失、土地も一町八反失った。（同書541頁には、二町五反余流失、とある）この災害復旧は年内に堤防八〇間工費四〇三円余、…続いて天竜川通りに川除堤防を明治一九年の県費予算で構築してもらうようお願いを出している。（以後洪水防止対策に毎年出費を余儀なくされ、工事も延々と続く）」

水神碑建立にはこのような能う限りの人事を尽くして、なお神にすがる住民の思いが託されている。



国土地理院発行：1/50000地形図「赤穂」



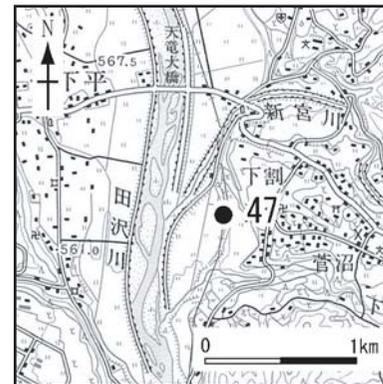
47 菅沼堤防の碑

駒ヶ根市中沢菅沼 竹花プラント南東

表 菅沼堤防の碑 駒ヶ根市長竹村健一書

裏 明治三十年に構築された菅沼堤防は後生にはかり知れない恩沢を遺した。依て築堤後九十年を経た今日記念の碑を建て先祖の偉業を顕彰する。昭和六十二年三月二十二日 前河原土地改良区 外有志一同（1987）

「明治三十年に構築された菅沼堤防は後生にはかり知れない恩沢を遺した。」という。それほどに強固な堤防であることを裏づけるものとして、『駒ヶ根市誌現代編下巻』489頁の次の記述を上げる。「菅沼堤防の桜 明治二十九年六月の大水害で百間の大土手（明治十八年県税工事）の中央が決壊し被害がでた。翌年築堤延長二百間・根留沈床二百間、面坪八百坪、工費八千五百九十八円で、当時県土木規則により地元請負となり、竹村彥三・菅沼政太郎が責任者となり、同年七月廿日竣工し、「今回の復旧堤防は当地に於て未だ嘗てあらざる所の設計にして百年の長計如何なる大洪水と雖も、之を破壊する如きは万なからん」と喜んでいる。この後これ程の改修記録は見当たらない。桜と松の植樹は堤防竣工後であろう。」



国土地理院発行：1/50000地形図「赤穂」



48 井上井月句碑 ④

駒ヶ根市下平 小鍛冶橋西 原治久氏田畔

表 鱈若し橋も小舟もある流 井月（鱈はあゆ）

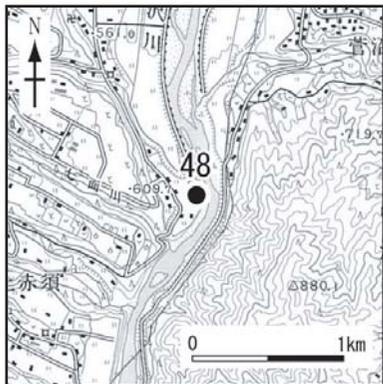
碑陰 無宿の俳人柳の家井月は越後の産、安政の頃伊那に現れ、この地に幾多の名吟と超俗の逸話を遺す。天竜を東に西にさすらい「小鍛冶の渡し」を渡り、鱈の句・築の句を詠む

築掛ける村相談や稲の花 井月

自然詩人の面目躍如、明治二十年ここに六十六才の生涯を閉ず。没後百余年その文雅を偲びこの碑を建てる。平成己巳一九八九年秋 原治久

碑石 高さ100cm、幅180cm。

若鮎は小鮎と同じだが語感は変わり、青年のように澁らつと激流を遡る。駒ヶ根市小鍛冶から天竜川の対岸に橋が復活して、その近くにこの句碑は建立された。「鱈」は、辞書では「はや」に当てるが、俳諧ではあゆと読ませる。井月だけでなく、昔から俳諧の世界で「あゆ」としたらしく、高井几董なども使っている。



国土地理院発行：1/50000地形図「赤穂」



49 駒ヶ根土地改良区記念碑

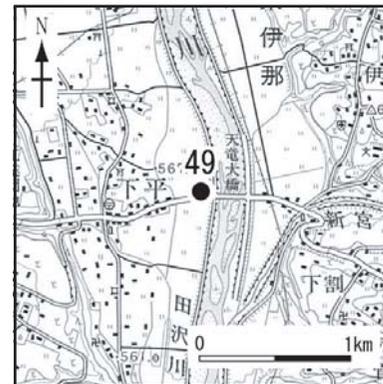
駒ヶ根市下平 農村環境改善センター前

表 和稔

裏 下平は天竜川大田切川の右岸に拓けた平坦地である。しばしば見舞われる水害にそなえて、部落は挙げて協力し、堤防の完備に努力をなし、井筋の開発を計り、ついに豊穰な田園を形成し、今日に至ったのである。しかしながら今や我国経済の躍進に伴い、近代化農業の基盤を築くためには更に耕地の拡大と土地の整備を計り、科学的経営の実を挙げ、以て農家の福利増進の最大目的を果たす時が来たのである。則ち組合員二百三十七名を以て昭和三十一年土地改良区を設立し直ちに工事に着手、昭和三十七年ついにその完成を見るに至ったのである。工事概要は区画整理百町歩、開田四十四町歩、排水路十軒、道路二十二軒、水路二十四軒、ポンプ揚水百五十馬力、橋梁暗渠掛樋三百箇所にして、経費総額壹億七百九十万円。そのうち七割は関係者負担、三割は国費の助成をもって成る。かかる大事業を立派に完成なし得たことは互譲親和の精神に徹した組合員が叡智を百年の大計にいたした事申すまでもないことながら、関係諸官庁並に關係された方々の指導援助の賜に外ならない。かくして整然たる農地はまったくその面目を新たにし、近代装備による農業の画期的発展は期してまつべきである。ここにその事業の完成を記念し、一碑を建てその偉業を後人に伝えるものである。

昭和三十八年三月吉日 理事長中原潤一 執筆片桐泰嶽

同所に平成8年(1996)11月吉日、「再圃場整備事業」の完成を記念して、「天聲應稔」碑と副碑が建立された。(次頁へ続く)



国土地理院発行：1/50000地形図「赤穂」



圃場整備事業記念碑 前頁と同所に、平成八年十一月吉日、「再圃場整備事業」の完成を記念して、「天聲應禳」碑と副碑が建立された。副碑の要点をここに記す

駒ヶ根市の重点課題、下水道終末処理場の用地を、ほ場整備で捻出確保をとの要請を契機に、21世紀を見据えた農村環境、基盤整備を実施。事業概要は、総事業費29億5600万円、ほ場整備面積217ha、なかでも南北に縦断する幹線道路と下街道本線を連絡する市坂橋の出現は、ほ場の大区画化と用水のパイプライン化による近代的施設の実現と併せて下平の景観を一新するものである。再和稔に感謝し、先達の苦労をおもいこの碑を建立する。

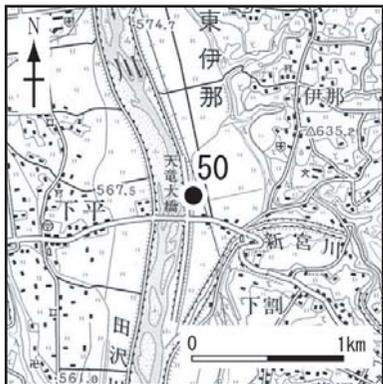
平成8年11月 駒ヶ根土地改良区
『駒ヶ根市の石造文化財』101頁

50 水神

駒ヶ根市下平 天竜大橋左岸上流200m

表 水神 碑高58cm
裏 明治三十一年十一月 赤穂村下平 小出金七(1898)
同所にはもう一基の水神(銘文左側 昭和七年五月吉辰1932) 碑高77cmがある。

『駒ヶ根市の石造文化財』101頁



国土地理院発行：1/50000地形図「赤穂」



51 大山祇神・水波能売神

上伊那郡飯島町田切春日平

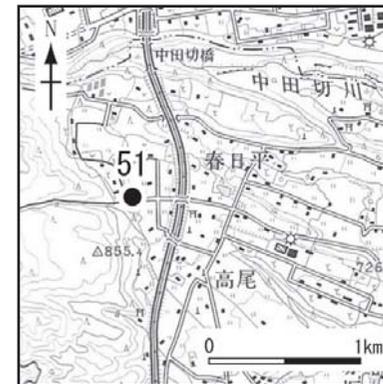
田切上流地域灌漑百余町歩の偉業

春日平柳ノ脇の帳付森という森に巨碑が立っている。すぐ西にコンクリートの水路があり、冬の今は水量は少ないが、きれいだ。その西には「飯島上水道田切低区配水池」が音を立てている。

高さ332cmの巨碑で、主文「奉斎大山祇神 水波能売神」裏「明治九年五月六日祠 昭和参年九月再建立」とあり、最初明治9年(1876)に建立したものを何かの都合で昭和3年(1928)に再建した。北の駒ヶ根市との境を流下する中田切川から取水した猿ヶ城用水完成記念の建立。田を拡張するため安定した用水を確保したい。水源をつかさどる山の神、水をつかさどる水の神を祭って、切に祈る先人願いが痛いほどわかる。

飯島の地は中央アルプスから天竜川までの広大な扇状地で、肥沃な穀倉地帯。水稲は標高700m以上は冷害を受けやすい。天竜川が流れ下る南の飯島から下伊那地方は古来気候面で稲作に恵まれている。弥生文化が早く開けたのもむべなりと思う。

手前にもう一基「猿ヶ城用水記念碑」があり、この用水開削の経過が詳しい。碑面上部に、「猿ヶ城用水記念碑」と篆書。本文は酒井伊之吉(1872-1941)の撰并書。氏は田切生まれ、教師の傍ら詩歌も巧み、四洲と号し書道を能くし、泰東書院5回入選の腕前。氏の揮毫した碑は近辺に数多い。



国土地理院発行：1/50000地形図「赤穂」



52 猿ヶ城用水記念碑

上伊那郡飯島町田切春日平

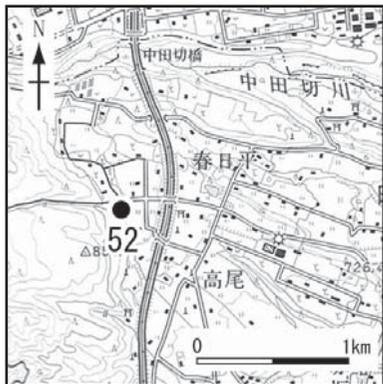
明治初年(1868)企画の用水、明治9年(1877)竣工

「猿ヶ城用水記念碑」の本文は、長文だが判読してみる。

抑々(そもそも)農村の開発は水利に俟つもの甚だ多し 先覚者風に見る所あり 即猿ヶ城用水路の開鑿を企て明治初年より率先して輿論の喚起に勉め同七年八月衆議を纏め 先づ水利に関係ある田切村に交渉を重ね 其結果郷沢川より為替井を掘割ることに諒解を得 又関係ある赤穂村にも承諾を求めたり 明治八年四月県庁に其手続を出願せし処同九年二月許可あり 直に該工事に着手することとなれり 然るに当時測量の方法未だ幼稚にして事業捗らず 其苦心一応ならざるものありき 加之予定段別七町歩に比し費用亦莫大を要するものあり 然るにも拘らず同年五月用水路の竣工を見るに至りしは全く先覚者並郷党一致共力の賜と謂ふべきなり 明治三十二年五月田切部落より分水の交渉を受け協議成立し全部落を加へ共存共栄の実を挙げ以て今日に至れり 工事前水田僅一町六七反歩に過ぎ 而も時々旱魃の爲めに困みしを之に反し現今の灌漑区域実に百余町の広きに及び更に将来の開墾地をも潤して余あらんとす

洵に国家の爲め慶賀に堪へず 茲に工事の概要を叙し以て猿ヶ城用水路を記念せんと云爾 酒井伊之吉撰并書

裏 猿ヶ城用水路開鑿 見込段別 発起人 略 世話人 略 同賛同連名 略
御大典佳辰 昭和三年十一月建之 高尾 町谷 椰ノ脇中



国土地理院発行：1/50000地形図「赤穂」



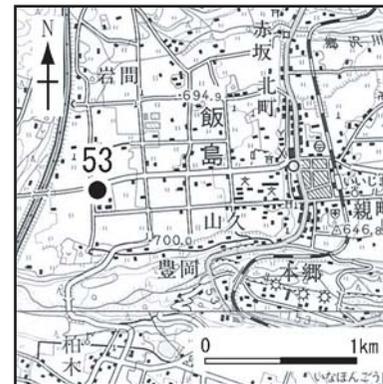
53 開墾記念碑

上伊那郡飯島町飯島上の原 選果場東

表 大正新田開墾記念碑 長野県耕地課長 正五位勲五等穂坂申彦書

裏 工事着工大正元年二月 工事完了昭和三年三月 総地籍百拾六町八段二畝二十四歩 昭和十一年十月 飯島耕地整理組合建立

新井用水 樽ヶ沢浄水場の南の与田切川から北側へ引水し、飯島地区一円を潤している。開削は、明治27年(1894)頃から下平邦蔵たちによって計画が進められた。文化十三年(1816)に定められた水利権の取り決めの内、明治35年(1902)に、飯島区と本郷区の間で分水法を改める契約書が取り交わされ、分水量は、飯島区五・六に対し、本郷区四・四となった。明治37年(1904)に工事が開始され、明治40年(1907)に通水式が行われた。この用水路の開削によって、昭和3年(1928)3月、総面積一一六町八段二畝二四歩の大正新田が開墾された。



国土地理院発行：1/50000地形図「赤穂」



54 天流功業義公明神

上伊那郡中川村片桐田島 天の中川橋西

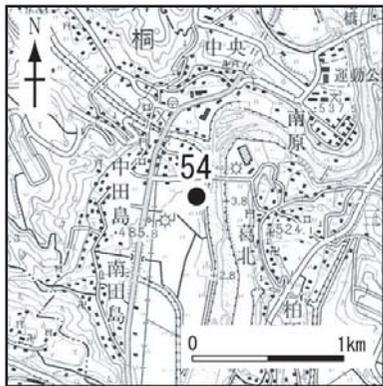
松村理兵衛の治水事業を讃える

中川村田島、天の中川橋西に九頭竜王大権現像があるが、そこには文化六年(1809)に同時に建立した更に二基の文字碑がある。

一基の主文は、「天流功業義公明神」であり、他の一基は「大聖天王廟碑」で、共に裏面に漢文が刻まれる。書いた人は、平安胤(たいらのやすたね)。その最初は、「洪範九疇 鑄九鼎……」で、以下難しい文字が続くが、洪範、政治道德の基本法則、九疇は、天下を治める九つの大法をいう。中国の太古の夏王朝の禹(う)が堯舜(ぎょうしゅん)以来の思想を集大成したもの。全文の要旨は、松村理兵衛三代の治水事業の功績を讃えたもの。治水の功績のあった松村氏を禹(中国古代の聖王。堯舜に仕えて、黄河の洪水を治め、舜の譲りを受けて、夏王朝を開いた。)には及ばないが、その下、その次にあると讃えた。

天竜川に前沢川が落ち合う田島耕地100haは、しばしば洪水に襲われた。松村忠良は、祖父忠欣(1721-1785)が、幕府の許可を得て築堤に着手し、父常邑が引き継ぎ、漸く自分の代に完成を見たので、文化六年(1809)にこれらの碑を建立した。巨大な石を運んで構築した堤防は今に残る。

それは、特に忠欣の徳を称えてのものであろう。天流功業碑公明神の神号は、文化十二年に京都の卜部公文所から贈られたという。すると、文化六年の建碑は、贈られる前のことになる



国土地理院発行：1/50000地形図「飯田」



55 蓮に巻き付く蛇

上伊那郡中川村葛島 柏原

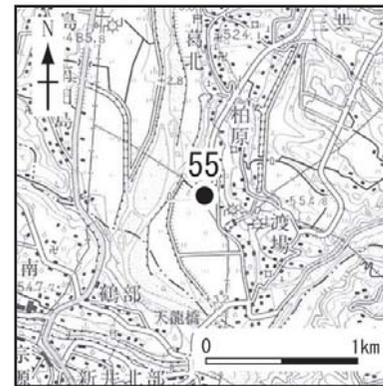
人間の祖先は蛇、太古の蛇信仰

中川村葛島の柏原集落は村の南端で、松川町に近く、天竜川左岸の静かな農村。伊那-生田線から狭い道を西に下ってすぐの下平寿昭氏東路傍。高さ80cmの自然石の表面をえぐって蛇像を浮き彫り。蓮の華が中央に、葉が二枚左右に、その茎に太い蛇が巻き付いている珍しいもの。なんという華やかなよそおいの蛇像であること。これはどういう願いを込めたものであろうか。蓮華といえば、仏教の関連を考えるが、実はどうか。

蛇をみてゆくと、人類との密接な関係を思わずにいられない。中国で、伏羲(ふくぎ)と女媧(じょか)は、古伝説上の帝王で、天地開き始めの創世神。

この二神の像は蛇身人首(身体は蛇で頭だけ人間)の兄妹神で、しかも尾をからめているところを見ると、夫婦である。要するに、中国の祖先神は蛇である。この世の始めの洪水をのがれ、天の裂け目をつくろって平和を将来し子供を作って栄え、人間の祖先となった。

日本でも、縄文中期の土器に躍動する蛇は、蛇信仰の古さを示すが、奈良の三輪山の姿は、とぐろを巻く蛇であり、女のもとに通う美しい男の正体は実は三輪山の主の蛇であった。日本の男祖先神は蛇であった。神武天皇の祖母・母も竜蛇であり、皇居の女祖先神もまた竜蛇であった。



国土地理院発行：1/50000地形図「飯田」



56 九頭龍大権現碑

下伊那郡高森町山吹下平 松木土場

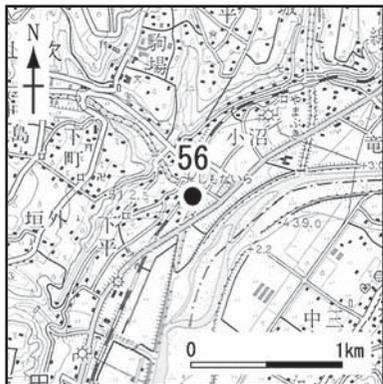
伊那市上牧、宮原和の大作

高森町下平の松木土場に立つ九頭龍大権現の碑は、弘化四年（1847）三月の建立。当初建立の堤防から松木土場（天竜川西200m余、飯田線下平駅の南の田園地帯）に移転。高さ210cmの自然石の正面に「九頭龍大権現 当領主拜書」と雄渾な筆致。左側に「弘化三丙午年十二月吉辰 当村中」と刻む。当領主とは、山吹領主第十一代座光寺為巳（ためみ）。座光寺氏は江戸時代初慶長六年（1601）から明治まで山吹（現高森町）に陣屋を構え、山吹四ヶ村を知行した。その石高僅かに千四百十三石余。座光寺為巳は、十五歳で家督相続、弘化三年（1846）には四十六歳となるが、この間天保年間には凶作で日本中が飢えた。天竜川兩岸の村々は水害から田畑を守り、水を引いて田を作ろうと懸命だった。下平の天竜川堤防完成記念に堤防上に九頭龍大権現碑建立となった。弘化四年三月二十六日(1847.5.10)以降の入用の記録（寺沢将捷氏蔵「九頭龍様諸雑用覚帳」）に、

一、四十九人 和平 為金壺兩三分

一、三十三人 吉田石工 金壺兩壺分二朱

とある。和平には他に滞在宿賄い費として二貫四七四文支払っている。山吹領主揮毫の碑は、同じ為巳の揮毫で天保十三年(1842) 三月、北の大沢川・境沢川合流点に「天照皇大神宮・九頭龍大権現」碑を建立。次の十二代領主も九頭龍大権現碑を竜口の天竜川堤防他計二基建てた。いかに水防・水利に苦心したか、知れよう。



国土地理院発行：1/50000地形図「飯田」



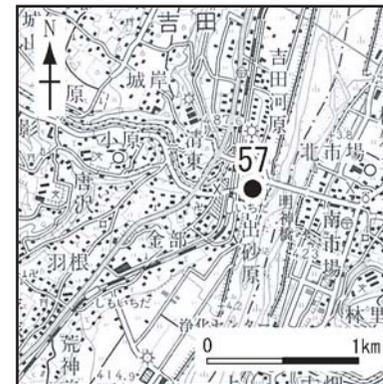
57 斎藤茂吉歌碑

下伊那郡高森町下市田 天竜川河畔 下伊那厚生病院南

向うより瀬の白波の激ち来る天竜川におり立ちにけり 茂吉

日陰 この歌は大正十五年十一月六日斎藤茂吉先生が初めて伊那谷を訪れ、此処より降り立ち、天竜川の壯観を詠まれたもの。筆跡は、その時随伴、翌年再度来伊の折故川手善人氏が揮毫していただいた短冊の書を拡大したものである。われわれは先生が此処にこの秀歌を残されたことを記念し、尚天竜川的美観を永く後世に伝えることを願い有志相ばかり多数の賛同を得てこの碑を建立したものである。昭和五十四年十一月六日 斎藤茂吉先生歌碑建設会

斎藤茂吉（1882-1953）山形県上市市金瓶守谷家に生まれる。東京斎藤紀一家に中学校から養われ、斎藤家の娘、輝子と結婚。東京帝大医科大学卒業、青山脳病院長、早く短歌を作り、「アララギ」の中心的な同人。歌集『赤光』『あらたま』『白き山』他多数。信州へは、大正15年（1926）3月島木赤彦病疫に関わり来訪、秋にも来て、また下伊那に来て、11月6日7日両日神稲（現豊丘村）において正岡子規の歌についての講演、7日には高遠に泊まっている。



国土地理院発行：1/50000地形図「飯田」



58 九頭竜像

飯田市上郷飯沼北条 御岳神社

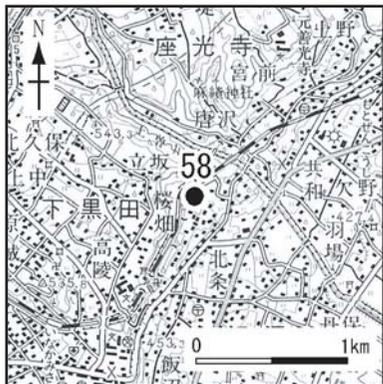
九頭竜の精巧な彫刻

川原石の前面を舟形にえぐって、とぐろを巻く九頭竜を浮き彫り。中心の竜の頭は大きく、二本の角、長い顔に眼光鋭い。左右に小さな八つの頭。これも精細で牙もよく見える。とぐろを巻く胴部に鱗が丹念に刻まれる。中川村田島にある九頭竜像とよく似ている。この方が石質の関係か、より鮮やか。『日本石仏図典』に水神の例として載る等、その精巧さが注目されている。銘文「願主西之年男」とある他は年銘が無く、造立年代未詳。

飯田市上郷飯沼北条は、飯田市街から北方の農村地帯。御岳神社は木下睦美氏所有で、同家南にあり、規模は小さいが、御岳様中心に石仏類が並び、幕末～明治ころの信仰の盛大さを偲ばせる。覚明霊神像・神明霊神や、駒ヶ岳一山・儉伽山・月山・羽黒山の各大権現・摩利支天像・不動明王像・塩竈神社・津島神社・奥山半僧坊・蚕玉神社・粟嶋大権現・秋葉神社・廿三夜等、山岳信仰や民間信仰の碑とみられる。

並んでいる神像のお顔を見比べると共通の特徴あり、短年月に同一石工によって彫出されたか。腕の良い石工だ。睦美氏のお話では、九頭竜は、幕末ころ喬木村阿島の河原さんの寄進。玉垣は、静岡県周智郡の人の寄進という。

九頭竜は治水の他、病気平癒・火防・虫除けなどにも霊験ありとされ、戸隠の山伏・御師が長野県から県外各地を回ってお札を配り、頼まれれば祈祷もした。また戸隠講が組織されて信仰が広まった。



国土地理院発行：1/50000地形図「飯田」

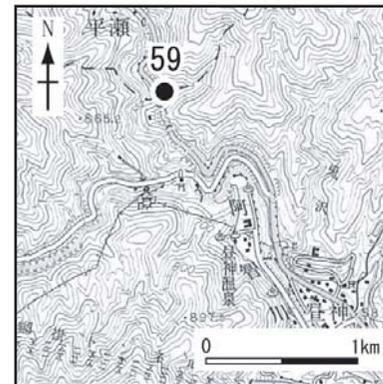


59 種田山頭火句碑 ②

下伊那郡清内路村下清内路 平瀬橋西

主文 馬茶屋之水 飲みたい水が音たててゐた 山頭火

昭和9年(1934)、木曾清内路の道中での作。下清内路居住の桜井伴氏は平瀬橋辺に四基を建立した。山頭火は、伊那市の井上井月の墓に参るのを目的に東上、清内路に一泊。八幡市の飯尾青城子宛ハガキ「木曾路の水はまことにおいしい、飲みたい水が音たててゐた。ここは山の奥の奥です、キロリがあって、コタツがあって、雪もたべられます、明日は飯田へ、それから天竜の水といっしょに浜松へ……」(ここに帰路は「浜松へ」とあるのを見ると山頭火は帰路は歩いて、あるいは電車で南下するつもりのようなのだが、鉄道はまだ開通していず、電車なら辰野へ出るしかなかった。)



国土地理院発行：1/50000地形図「中津川」



60 種田山頭火句碑 ③

下伊那郡清内路村上清内路 長田屋前

主文 おだやかに水音も暮れてヨサコイヨサコイ

死ぬるばかりの水は白う流れる

なんとかたいつぼみでさくら音頭で

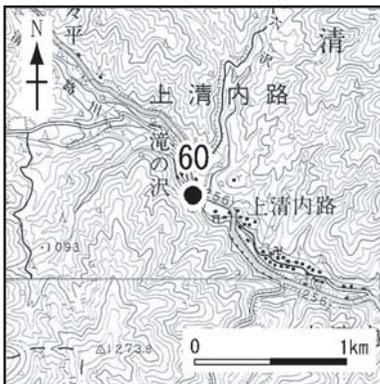
碑陰 主文左 漂泊歩行禪の俳僧種田山頭火は昭和九年四月十四日木曾より峠を越えてここ清内路に一泊しこの三句をのこして飯田へと旅立った。

今茲六句の星霜を距てて碑を樹て往時を追憶する 平成五年秋

撰と書 岡島良平

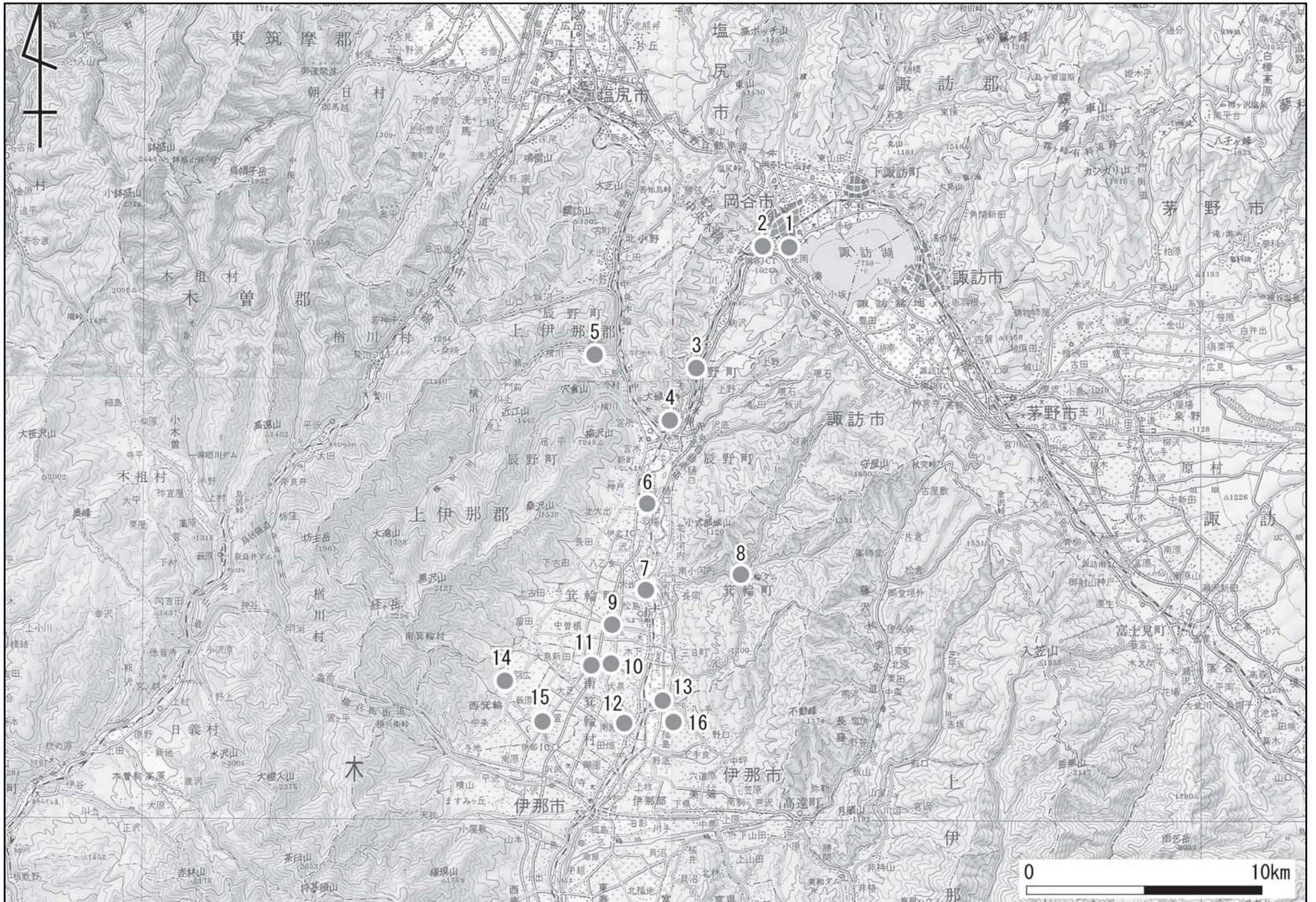
裏面 清内路山頭火研究会 代表 小池亨

山頭火は14日清内路に一泊した。その宿、長田屋の当主が小池亨。撰と書の岡島良平は、碧南市の文化財専門委員、書家。鳳来寺田楽堂の山頭火句額を初め、氏の揮毫になる山頭火句碑は全国に数多い。清内路にもこの句碑を含めて氏の揮毫の句碑が三基ある。



国土地理院発行：1/50000地形図
「中津川」・「妻籠」

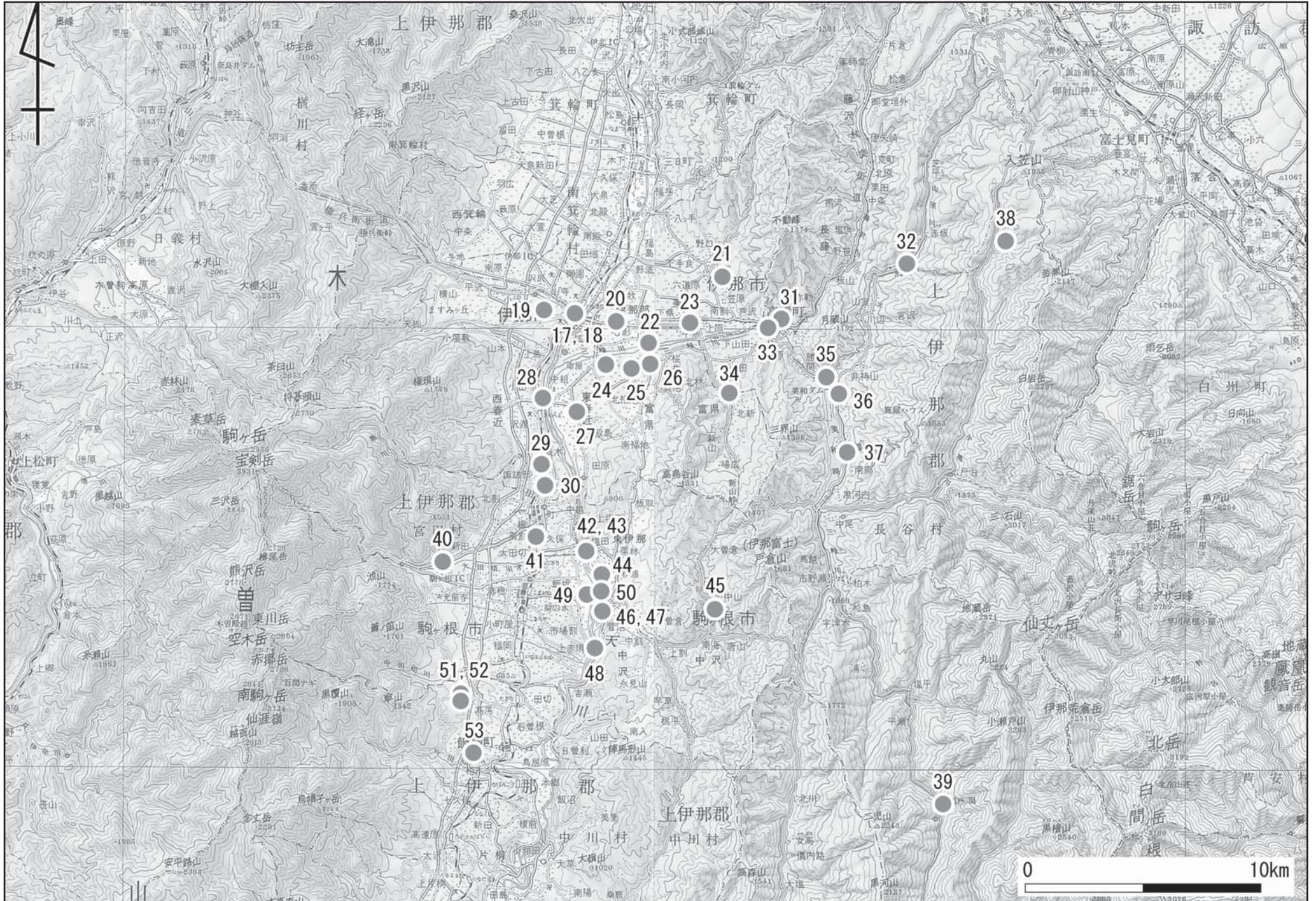




(国土地理院1/200000地勢図 「高山」・「飯田」・「長野」・「甲府」を使用)

この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の20万分1旧版地図を複製したものである。
(承認番号 平20関複、第125号)

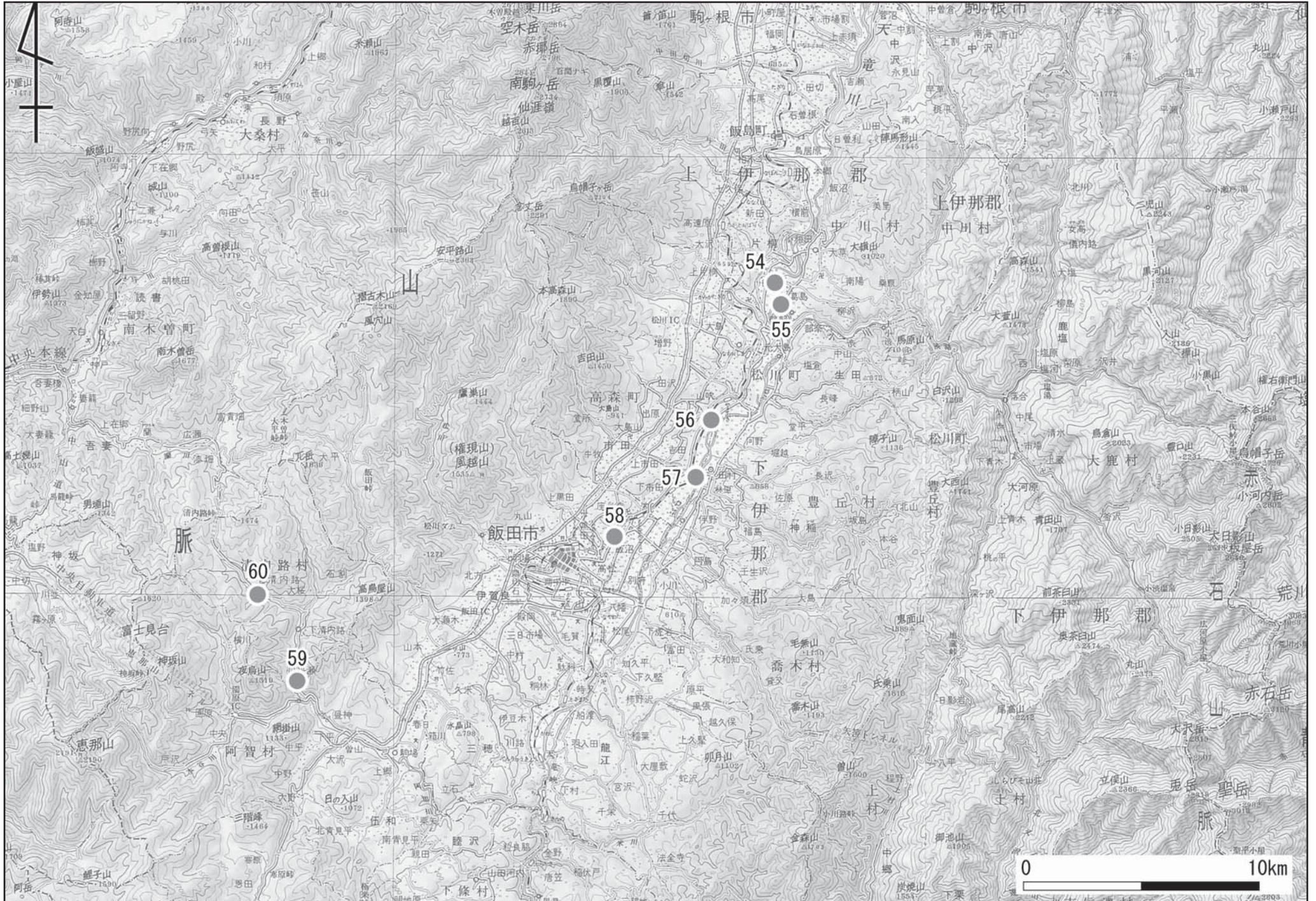
石碑分布図Ⅱ（伊那市～駒ヶ根市付近）



(国土地理院1/200000地勢図 「飯田」・「甲府」を使用)

この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の20万分1旧版地図を複製したものである。
(承認番号 平20関複、第125号)

石碑分布図Ⅲ (駒ヶ根市～飯田市付近)



(国土地理院1/200000地勢図 「飯田」・「甲府」を使用)

この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の20万分1旧版地図を複製したものである。
(承認番号 平20関復、第125号)

【参考資料】

『伊那』伊那史学会1957年以降毎月発行

『伊那路』上伊那郷土研究会1957年以降毎月発行

『上伊那郡史』名著出版1973年（初版1921年）発行

『おかや歴史散歩』諏訪文化社1984年（初版1983年）発行

『辰野町の碑』辰野町教育委員会1979年発行

『辰野町誌近現代編』辰野町誌刊行委員会1988年発行

『箕輪碑文集』箕輪町役場1968年発行

『箕輪町石造文化財』箕輪町歴史同好会2000年発行

『南箕輪村誌下巻』南箕輪村誌刊行委員会1985年発行

『伊那市石造文化財』伊那市教育委員会1982年発行

『みすゞ』美篤村誌編纂委員会1972年発行

『東春近村誌』東春近村誌刊行委員会1972年発行

『西箕輪誌』西箕輪誌刊行委員会2005年発行

『高遠町誌』高遠町長馬場恒好1966年発行

『高遠の石仏 付石造物』高遠町1995年（初版1975年）発行

『信州高遠の碑』高遠町教育委員会1989年発行

『高遠の史跡と文化財』高遠町教育委員会1993年（初版1983年）発行

『長谷村の石造文化財』長谷村教育委員会1997年発行

『宮田村の石造文化財』宮田村教育委員会2002年発行

『駒ヶ根市誌現代編下巻』駒ヶ根市誌刊行会1974年発行

『駒ヶ根市の石造文化財』駒ヶ根市教育委員会1997年発行

『飯島町誌下巻現代民俗編』飯島町1993年発行

『飯島町の石造文化財』飯島町教育委員会2006年発行

『中川村の石造文化財』中川村教育委員会2006年発行

「語りつぐ天竜川」の発刊にあたって

日本列島の中央部、諏訪湖から伊那谷を流れくんだり、遠州灘で太平洋に注ぐ天竜川。天竜川流域は、美しく豊かな自然環境に恵まれ、古来より数々の天竜川がもたらす恩恵に浴してきました。一方、いったん豪雨が続けば、日々の穏やかな表情を一変し、「暴れ天竜」の異名を持つほどの荒れようを見せて、崖を崩し、堤防を破り、人々の暮らしを脅かしてきました。

天竜川上流河川事務所では、流域の人々が安心して暮らせるよう、また天竜川が住民の心のふるさととして親しまれるように、半世紀以上にわたり、地域の皆さんの多大なご協力のもと、河川事業や砂防事業などを行い、安全・安心な川づくりを進めています。また、今年度は河川整備計画の策定に向け、「治水」「流水管理・水利用」「環境」「総合土砂管理」「維持管理」の5つの視点から天竜川の30年後の姿を皆さんとともに考えております。治水事業の実施にあたっては、流域内の自然や文化、歴史を十分に理解し、地域の皆さんとの意見交換を継続的に行い、事業に反映していくことが大切だと考えています。

「語りつぐ天竜川」シリーズは、天竜川に関する地域の知見や経験を収集し、広く地域共有の知識とすることにより、地域の皆さんに天竜川に対する認識を深めていただき、よりよい天竜川を築いていくことに役立てるために、昭和61年度より発刊してきました。

そのシリーズも今回で61巻目となり、これもひとえに天竜川を愛し大切にしてくださる地域の皆さん、そしてその気持ちに応え、後世に天竜川の記録を残そうと、お忙しい中ご協力いただいた執筆者の方々のご尽力の賜物と深く感謝を申し上げます。

近年、各所で自然災害の被害が報告されており、天竜川流域においても平成18年7月には12名の死者を出す未曾有の災害が発生しており、次なる豪雨に備えたさらなる整備と、後世にこれらの災害を伝承していくための取り組みが求められています。天竜川上流河川事務所では、「安全・安心」「環境」「交流」という3つのテーマをもとに、これからも川づくり、地域づくりに努めて参ります。今後も皆さんのさらなるご理解とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

なお、ご執筆頂いた方々には、自由な立場からお考えを披瀝して頂いていますので、国土交通省の見解とは異なる場合がありますことを付言させていただきます。

国土交通省中部地方整備局 天竜川上流河川事務所
所長 伊藤 仁志

「語りつぐ天竜川」目録

- | | | | |
|-----------------------------|--------------------|--|---------------------|
| 1. 伊那谷の気象 | 米山 啓一 著 | 32. 天竜河原の開発と石川除 | 塩沢 仁治 著 |
| 2. 天竜川上流域の立地と災害 | 北澤 秋司 著 | 33. 伊那谷は生きている | 松島 伸幸 著 |
| 3. 天竜川に於ける河川計画の歩み | 鈴木 徳行 著 | 34. 天竜川の災害伝説 | 笹本 正治 著 |
| 4. 総合治水の思想 | 上篠 宏之 著 | 35. 天竜川の災害年表 | 笹本 正治 著 |
| 5. 総合治水と森林と | 中野 秀章 著 | 36. 天竜川水運と樽木 | 村瀬 典章 著 |
| 6. 伊久間地先に於ける天竜川の変遷 | 松澤 武 著 | 37. 水辺の環境を守る | 桜井 善雄 著 |
| 7. 天竜峡で見た天竜川水位の変遷 | 今村 真直 著 | 38. 諏訪湖 - 氾濫の社会史 - | 北原 優美 著 |
| 8. 村境は不思議だ | 平澤 清人 著 | 39. 河川工作物と魚類の生活 | 中村 一雄 著 |
| 9. 諏訪湖の富栄養化と生物群集の変遷 | 倉沢 秀夫 著 | 40. 天竜川上流域の過疎問題 | 山口 通之 著 |
| 10. 諏訪湖の御神渡り | 米山 啓一 著 | 41. 資料が語る 天竜川大久保番地所 | 松村 義也 著 |
| 11. 理兵衛堤防 | 下平 元護 著 | 42. 天竜川上流 河辺の植物と植生 | 関岡 裕明 著 |
| 12. 近世 天竜川の治水 - 伊那郡松島村 - | 市川 脩三 著 | 43. 水利開発にみる中世諏訪の進行と治水 | 藤森 明 著 |
| 13. 川筋の変遷 - 天竜川と三峰川の場合 | 唐沢 和雄 著 | 44. 横川山巡覧記 - 「辰野町資料第87号」より - | 辰野町教育委員会
赤羽 篤 校訂 |
| 14. 伊那谷山岳部の降雨特性 | 宮崎 敏孝 著 | 45. 天竜川の鳥たち | 福与 佐智子 著 |
| 15. 天竜川の橋 | 日下部新一 著 | 46. 遠山川流域の民族とふるさとイメージの創造 | 浮葉 正親 著 |
| 16. 伊藤伝兵衛と伝兵衛五井 | 北原 優美 編 | 47. 田切ものがたり | 赤羽 篤 著 |
| 17. 天竜川の魚や虫たち | 橋爪 寿門 著 | 48. カエルと暮して | 山内 祥子 著 |
| 18. 天竜川のホタル | 勝野 重美 著 | 49. 伊那の冬の風物詩 ざざ虫 | 牧田 豊 著 |
| 19. 天竜川流域の村々 | 松澤 武 著 | 50. みんなの三峰川を次世代に | 三峰川みらい会議
事務局 編 |
| 20. 小洪川水系に生きる - 人と水と土と木と | 中村 寿人 著 | 51. 三峰川ものがたり | 三峰川みらい会議
北原 優美 著 |
| 21. ものがたり 理兵衛堤防 | 森岡 忠一 著 | 52. 天竜川水系の水質
- 「泳げる諏訪湖・水遊びのできる天竜川」を目指して - | 沖野 外輝夫 著 |
| 22. 量地指南に見る 江戸時代中期の測量術 | 吉澤 孝和 著 | 53. 天竜川の帰化植物たち | 木下 進 著 |
| 23. 土木技術と生物工学 - 生きものを扱う技術 - | 亀山 章 著 | 54. 中央構造線読み方案内 - 諏訪から大鹿村地蔵峠まで - | 河本 和朗 著 |
| 24. 戦国時代の天竜川 | 笹本 正治 著 | 55. ふるさとの山 駒ヶ岳ものがたり | 赤羽 篤 著 |
| 25. 天竜川の水運 | 日下部新一 著 | 56. 近世信州伊那郡大河原村の自然環境と人間 | 松原 輝男 著 |
| 26. 総兵衛川除 | 市村 威人 著 | 57. 地名を通して見る 天竜川と人々の暮らし | 松崎 岩夫 著 |
| 27. 紙芝居 開墾堤防 - 下伊那郡豊丘村伴野 - | 竹村浪の人 著 | 58. 伊那谷の土砂動態 | 久津見 生哲 著 |
| 28. 昭和36年伊那谷大水害の気象 | 奥田 穰 著 | 59. 天竜川と生きて | 下平 長治 著 |
| 29. 天竜川の淵伝説 - 「熊谷家伝記」を中心に | 笹本 正治 著 | 60. 明日に伝える三六災害
- 川路・龍江の水害体験談と子ども達の取り組み - | 川路・龍江の方々 |
| 30. 天竜川の源流地域 | 赤羽 篤 著 | 61. 天竜川の川の碑 | 竹入 弘元 著 |
| 31. 東天竜 | 三浦 孝美 著
仁科 英明 著 | | |

竹入 弘元 (たけいり ひろもと)

1932年1月 上伊那郡辰野町生まれ

信州大学文理学部卒業

長野県内の高校教師を務める

現在 長野県文化財保護協会理事

日本石仏協会理事

上伊那郷土研究交流連絡会会長

著書 『伊那谷の石仏』 他

(題字 王羲之より集字)

天竜川の川の碑

企画 国土交通省中部地方整備局

発行 天竜川上流河川事務所

著者 竹 入 弘 元

編集 日本工営株式会社

長野県駒ヶ根市上穂南7-10

〒399-4114 Tel. 0265-81-6411

本社 東京都千代田区麴町5-4

〒102-8539 Tel. 03-3238-8257